



デジタルコンテンツとして
の
文庫

京矢

漸く電子書籍というモノに対して、あれこれと情報が出てくるようになりました。

このブログを書かせてもらっているサイトもそうですが、電子書籍というモノに対するフォーマットが、漸く整い始めている気もしますが、なぜこんなに進展がないのか？と、色々疑問に思うところであります。

まず、世界標準フォーマットというのがありますが、それに対する囲い込みにが、あまりにも、業者主導だからじゃないかと思えます。

勿論アーティストであったり、作家さん、クリエイターさん側の、不安や無秩序な複製行為に対するの懸念もあるでしょう。

かく言う著者も、あれこれ書いてる割には、鳴かず飛ばずで、表に出る気配など有りません。とつてもつらいですが、それは現実であります。

しかしですね、これほどまでに、インターネットとその情報伝達網の早さを考えると、今までの出版社やレーベル（以後、販売サイドと、呼ぶことにする）の役割というの、実は一つ、果たし終えてるのではないか？と思うところでは有るのですよ。

特にツイッターなんかは、そんな情報伝達手段の一つであると思うのです。

問題は、悪質な複製行為が横行しないか？というところで、それをどう守るか？という部分にあると思うのです。

フォーマットといってもあらゆるフォーマットはプログラムとデータのカタマリであり、何に対して、何が出来ないという制限は以外に低い筈なんですよね。つまり、追加事項と申しましょうか……。

異なるフォーマットにおいても、同じ保護は可能であり、それは新しいフォーマットを作るということには直結しない。

音楽、作画、文章、ベクトルもデータ量も異なりますが、保護すべき部分は、デジタルデータであり、その方法論なんですよね。

要するに、古いローダでは読み込むことの出来ない、同系統のフォーマットという事になります。

技術的な問題ですが、キャプチャーした有料動画を再生しようとすれば、期限切れになっているのと同じです。

尤も、レンタルと違い購入というのは、紛失以外半永久的でなければならぬですし、可能な限りワンユーザーの利便性に答える必要があると思えます。

携帯電話の着メロなどは、本当に非道い仕様でした。おかげでダウンロードする気も失せて、最小限のものしか、落としませんでしたし、MP3も扱えないし、携帯電話で持ち運ぶためには、曲を加工しなければならなかったりでした……。

今後この件に関して、どのようになるかは解りませんが、購入した楽曲においての、個人利用のための、持ち運びに関しては、問題がないはずなので……と、色々頑張ってはみたモノの、労力ばかりで、音質は落ちる、データサイズには悩まされる……で、スマートフォンにするまで、本当に苦労しました。

文章も同じで、フィーチャーフォンでは、やはりPCとの仕様不適合という部分で随分悩まされました。この転換期に入って、もう随分経ちますが、漸くストレスフリーな状況になりつつあります。

利用者がストレスフリーになるということは、つまり、専門的なフォーマットが崩壊したと言っても過言ではありません。

楽曲においてはMP3。文章においてはPDF。現在は、EPUB3なども、見え始めましたが、EPUB3が流れに乗るのは、もう少し後になるでしょうね。

いや、ひょっとしたら思った以上に、マイナーフォーマットになる危惧さえ感じています。

そもそも展開が遅すぎますし、なんだか少し、やっていることに疑問を感じずには居られなくなったので……。

それでは、本文に突入して生きたいと思います。

京矢

<https://twitter.com/Kyouya999>

これからは、直結型になる

これからの文庫というものは、恐らく著者と閲覧者の直結型になるのでは？と思っています。

それはいったいどういうことなのか？と言いますと、簡潔に言えば、出版社を通さない形と言うことになるのですが……、実際は、今のままの出版業界の手法ではなく、このブログを読んでいただいている方には解る都思いますが、こうしたサイトを通じての購読というのが当たり前になると思うのです。

今は出版社と言う概念が有り、本を得るには、出版社サイトに行き、本を購読する形で、デジタルコンテンツの購入を行っていますが、では、著名な作家さんが、出版社に縛られない創作活動に打ち出し、ツイッターなので、新刊出来ました！となったばあい、皆さんどうするでしょうか？

それに 600 円で売られている本が 300 円になるなどのメリットも生じるでしょう。

何故そうなるのか？という誌面を媒体としたリスクが減り、大幅なコストカットが望めるからです。

それでもやっぱり、紙面の本がいい！という人は大勢おられると思いますが、寧ろ文庫になってほしい本こそ、文庫になるという、姿になると思うのです。

何でもかんでも文庫になるわけじゃなく、物故になるべき本が文庫になる。という形式を取る。

そして、出版社は、文庫にしたい本を文庫にし、作家と検討する。

今までは、売るためには、出版社、あるいは個人で、文庫本にする必要性があり、そこには在庫というリスクが存在していたため、作家サイドは容易に動く事が出来ませんでした。

勿論単純ではないです。何故なら、体裁というものがあるからです。

文章には体裁があり、文字の並びの美しさで、文章に対する期待感を持たせる事も、作家には求められます。

つまりそこには優秀な編集者というものが、存在し、彼もまたフリーの編集者として、出版社に縛られない活動をするようになってゆくことでしょう。

つまり、著名な作家になればなるほど、自らのプロジェクトチームを持ち、作品のクオリティをより上げてゆく事になるのだと、結論づけます。

勿論、受け入れられるための作品を書くこともまた、自己責任になるわけですが……。

今は、売れる本誌か売らない。売れるものを売る。売れるものを作る。これは、商売としては当たり前ですが、作品としては、どうなのでしょうかね？

話はそれますが、多くの名画が、作者の没後に、希少価値を上げていることは言うまでもありません。しかし希少価値が上がった頃には、作者の財産にはなりません。多くは作者となんの関係もない保持者の利益になっているという、残酷な状況さえあります。

一億総クリエイター時代と呼ばれる中、そのほとんどが自己資産を増やすことが出来ずに、無償公開に振り切って居ることでしょう。

これは、自分の作品をより多くの人に、知ってほしいという、切実な願望から来ていることが、ほとんどです。

どれほど画力の高い、作画さんも、縁の無い状態では、収入にならないし、何よりここ最近の消費傾向において、稼いでいる人たちは、どのくらいいるのでしょうか？

勿論、新しい時代が到来しても、売れない人が売れることはないでしょうが、少なくとも売れるチャンスはあるべきであり、それは決して販売サイドに縛られて良いという意味でもありません。

現状様々な、電子コンテンツの販売サイトがあり、この文章を書かせていただいている、サイトもそうでもあります。

ですが、累積してゆく電子コンテンツの中で、個人の古い作品というのは、検索にヒットしづらいでしょうし、ライトノベルなどは、放置状態のモノを含めて、数万にも及びます。完成した作品が、未完成の作品に埋もれている状態は、決して、完成された作品において、恵まれた状況ではなく、最終的に埋没し破綻する傾向となり、伸び悩みが生じます。これでは多くのクリエイターにとって、あまりに夢がありません。

なにか方法論がないか、模索したいと思い、このブログを立ち上げました。

そして、自身も埋没気味です（笑）しかし、文章を書いてただただ、売れないと嘆いていては、従来のクリエイターと何ら変わりが無いので、せめて方法論だけでも、持ち上げたいと感じました。

本当は、自らサイト作りにも専念したいと思っていたのですが、もう時間が無いようです。

結局今まで販売サイド手動のコンテンツ販売では、デジタルコンテンツは死んでしまうと、思ったのが大きな動機の一つで、デジタルコンテンツの死亡は、多くのクリエイターの埋没に直結するという危機感が、アイデアの模索と無償放出という、行動のきっかけであります。

さあ、果たしてそんな都合のアイデアが出てくるのかどうか？あくまでもブログですので、ご容赦を……。

どうすればいいのか考える……

では、どうすればいいのか……という事を考えたいですが、ひょっとしたら、ダメダこりゃ……と思う人も居るかもしれませんが、ご容赦を……。

大雑把ではありますが、何となく思っている、流れ図を書きます

今までの例

新規著者→受賞（出版社）→出版（紙面の書籍）

新規著者→持ち込み（出版社）→出版（紙面の書籍）

連載著者→打ち合わせ（出版社）→出版（紙面の書籍）

勿論、完成度というものを忘れてはいけません。一億総クリエイター時代と言っても、それは権利の広がりであり、実力が誰にでもあるというわけではありませんが、少なくとも誰にでも門戸が広がったということだけは確かです。

此処でネックなのは、売れると思ったり、受ける！と思った作品が、受賞しておりブームに乗れない作品の多く派切り捨てられたりといったケースが、五万と有ると言うこと。

文学小説などは、きっとそういう流れではなく、奥深い文章が、その魅力の多くででしょうが、どのみち露出のない文章は、売れません。この共通点だけはどうしてもありません。

本来売れるはずの文章である、5番目くらいの微妙なポジションの文章が、実は多くの共感を得るものであるなどということは、往々にしてある話でして、今はやりのAKBは、決してトップグループの美少女ではないが、普通の中にある可愛い女の子だったりします。

要は、露出の問題で、それは宣伝費であり、それを決めるのは出版社で、当然予算の中で行われるわけがあります。当たり前です。

しかし、着目してほしいのは、多くのコンテンツのほとんどは、自主制作により、自らの労働力のみで、できあがってしまうものも少なくないということです。

要するに宣伝力。この一言に尽きると思います。

宣伝力をつけるためには、多くの広告媒体が必要であると思いますが、個人に尤も不足しがちなものが、この広告媒体であると思います。

しかしYouTubeなどでも、たまにあります、ミリオンヒットの動画が存在します。しかし、ほとんどが無償動画であり、収益には至っていないでしょう。

面白いかどうか分からないものに、お金など出せないというのは当然の理屈であります。ですが、少し垣間見て、おもしろそうだな……と思うものに対しては、消費傾向になると思うのです。

デジタルコンテンツの強みというのは、冒頭だけを見せたり、劣化したものを表示させ、興味を持たせることが出ます。

この部分がフォーマットであり、媒体である思うのです。

小説なら冒頭の10頁、もしくは、見せ場の数頁。ここは、著者の見せ所だと思います。これは、宣伝能力の一つではありますが、俺としては、見せ場の数頁を解放し、物語の展開を敢えて教える方法論も、アリかなと思います。映画の宣伝なんか、激しいクライマックスシーンの、数カットを表示するのですから、良い方法だと思いませんか？

さて、今あるデジタルコンテンツの販売サイトの欠点は、量的な問題です。

これは少ないと言っているのでは有りません。寧ろ多いのです。しかし、これは一億総クリエイター時代という言葉に対して、矛盾する著者の見解であります。

何度も言いますが、一億有る作品が一億売れるとは言いません。しかし、今は危険すぎて手が出せないと言うのもあります。要するにコストに対するリスクであります。すなわち、宣伝能力の問題で、購入してソソしたな……と思うものを買いたくないという、消極的消費傾向からの、不買状態とも言えます。

そしてそれと同時に、損をしないフリーの面白い文章を見て、安全な満足を得るという、傾向。

これは、自分を知ってほしいクリエイターが、無償提供する現状と、無駄に消費出来ない消費者のニーズがもの見事に一致していると言えるのではないのでしょうか？

ここで、本来売れるはずの作品が、売れずに配布されている現状と、労働力以外のコストをほぼ必要としないデジタルコンテンツの現状の一致とも言えます。

原稿用紙とペンの消費もない、必要なのは想像力と発想力、そして宣伝能力と販売能力。

クリエイターにおいて、欠如している宣伝能力と販売能力の方法転換。ここに着目すれば、恐らく多くのクリエイターが、収入を取り戻すことが出来るのではないかとと思うのです。

では、どうするのか？

こういうのはどうでしょう。

勿論これには、販売するサイトというものと、適応したフォーマットという課題はありますが……。

作家→レビュワー→ユーザー（ファン）

こんな構図が浮かんで参りました。

レビュワーはアフィリエイトと少しにしていますが、少し違います。レビュワーは、確かに、作家の本を販売することで、利益を得ることが出来ますが、サイト内の、書籍を複数選択し、レビューを書き、販売に努めることで利益を得ます。

だったら、アフィリエイトか？いや、レビュワーは、サイト内の本を複数売る事で、利益を得ますが、複数の書籍を複数販売した合計金額が、売り上げとなります。

つまり、サイト内で、本屋を開くわけですね。

レビュワーは本を売るために、よいレビューを書かなくてはならないし、宣伝しなくてはならない。勿論よい作品を探さなくてはならない。何より、レビュワーは、サイト内での書籍購入が必須条件となる。

売するために購入するが、当然読む権利も発生する。まずは、第一の読者になる。

価格はどうするのか？などもあるが、レビュワー価格など、もうけると良いだろうか。

ただし、一つの作品に対して、無尽蔵のレビュワーを設けることは、不可能としたり、1作品に対して、配当をどれくらいにするのか？などの方法論も検討しなくてはならない。

思案中であるが、レビュワーが書籍販売に努めるという流れは、恐らくどのサイトでもやっていないのではないかと？

と筆者は思う。

作者は300円で本を売るとする。サイトの取り分を10%とする。

今までのサイトなら、270円が、利益になる。

しかし、宣伝能力の欠如と、購買意欲などを考えると、誰が購入するのか？ということになる。

だから、売れない。

しかし、誰かが面白いと思った作品を売ろうという意欲があるのならば、必ず購入者が存在するはずだ。だから、レビュワーが儲かる仕組みを導入しようと考えた。

販売配当を5円とする（単価設定は作家が決める）。

作家は利益が100円はほしいと考える。170円が、自由になる。

アフィリエイトの場合は、それぞれのサイトからのクリック量が、加算され金額となっていたら、

これでは、個人の利益に結びつくまでには相当大変である。配当五円で、1000円の利益を生むためには200人の購入者が必要となるのだから、それはもう大変である。

だから、複数のアフィリエイトをチョイスして、頑張るのだが、そもそも興味の無いサイトに足を踏み入れ、その中で宣伝のクリックを行うなど、奇跡に等しい。

そこで更に考える。

なぜ、5円の配当などと言ったのか？である。

勿論、レビュワーには宣伝してもらわなければならない。そのためのブログパーツも必要だろうし、ツイッターからの宣伝も行わなければならない。

ただし、作家が100円の利益を必要都市、販売単価の10%をサイトに献上するとしておいて、170円の活用禁が生じるという考えから、5円の配当をもらえるレビュワーが34人となる。

意味が分からない？と思うだろうがつまり、一冊売れるごとにより、34人のレビュワー全てに配当が入るというならどうだろうか？誰かが売れば自ずと5円の配当が入る。ただし、34人に限定。一人一円配当なら170人となる。

このあたりは、考え用だが、人気作家になればなるほど、レビュワーの数が不要になり、ツイッターなどでダイレクトに宣伝すれば良い。

また、レビュワーの絞り込みなども、徐々に行ってゆけば良い。レビュワーは、絶えず新しい書籍を探さなくてはいけない。

何冊単位でレビュワーと契約するのか？などもチョイスも自ずと生まれる。売れる作品は、一人何冊までのレビュワーとしての、権利が得られるのか？などの、パートナーシップも生まれるかもしれない。

売れない作家は自己利益を切り詰める必要が出てくるのは、当然のことだ。

ただ、レビュワーも無償で書籍を手にすることが出来るわけではない。売りたい本を、ユーザーとして購入しなくてはならない。その代わりに、安く購入する特権がある。

特権があるのは、レビュワーの配当数にかかる人数のみである。

300円の書籍で、100円の純利益販売価格における、サイトへのマージンが10%で30円、そこから差し引いた170円が、販売もにタイする資金源であり、5円配当のレビュワーが34人確保でき、彼らに対する販売金額が100円とした場合、3400円と初期回収となる。そしてそこから、サイトに対するマージンが340円であるため、レビュワーからの回収金額は3060円となる。

そこまでうまく回転するかは解らないが、仮にレビュワーが100冊のほんのレビューを書き、名レビュワーとなれば、彼の書店は自ずと潤うだろうし、レビュワーが何冊のレビューを書くかというのは謎であるが、こういう方法論を用いれば、一つのデジタル書店となるべき、存在が出来るのではないだろうか？

勿論コンテンツは、書籍だけに限らず、マンガや、音楽も、存在するし、デジタルコンテンツならば、同じ方法論がとれるはずであり、問題はフォーマットのあり方であり、サイト作りと併用して、著者が抱えている技術的な問題であるため、興味を持っていただいた、ベンチャー企業や、現役企業に、期待するしかない。

価値観の変貌

重複して記述することになると思います。

やはり紙である必要がある。書籍において、書籍を愛する人にとって、それはとても重要なことだと思います。しかし、書籍そのものは、作家において決して広い門戸とは言えません。

寧ろ様々な可能性に対して閉鎖的な存在であります。

出版社も、応募の際には、ブログの記載に関して寛容になったり、電子文書における応募を可能にしたりと、可成り柔軟な姿勢を見せておりますが、販売ルートとしての出版社は、相変わらず同じ手法をとっており、結局同じアイレベルで、出版物をとらえております。

著者は、デジタルコンテンツにおける、電子書籍というものにおいて、様々なギミックを懲らすことが一つのベクトルであるとするならば、より多くの作品が利益を得るための、ルートだとも考えております。

どちらかという、こちらのベクトルでの志向が強く、デジタルコンテンツならでは！という特殊性は、あまり考慮しておりません。

それはまた、新たな視点からの、ビジネスだと捉えております。

では、紙面における書籍に対して、どういう風に思っているか？と申しますと、紙面になる価値のある書籍が、ペーパーコンテンツになるという、より高い地位の確立を目指すべきだと思っているのです。

つまり、ベストセラーだからこそ、ペーパーコンテンツになると……。これは一つのステータスですね。

今は、アニメ化が決定されることで、ライトノベルなどは、その地位を確立しているように思えますが、書籍化決定！なるような流れになれば、面白いですね。

多くの電子出版物から、出版社がいかにか上手に、ペーパーコンテンツへと昇格するか？という、事です。

それまでは消費の少ないデジタルコンテンツで良いのではないかと考えています。

今のペーパーコンテンツである、書籍。特に述べる関係に話を絞るのですが、面白いからアニメ化にするというパターンと、アニメ化できそうだから、コンテンツになるパターンとありますが、書籍としての偏重傾向は、いかがなものかと思えます。

書籍が書籍であるが故のステータスが、紙面媒体だという流れになれば、それは一つの時代の変革ではないかなと、考えるところであります。

価値観の歪曲。映像化と書籍化。

過去の名作を映像化するという、方向はよく有る話だと思います。

作品に憧れ、是非映像化したい！と情熱を持っている人たちも多いはずですが、それは決して映像化されることを願って生まれ出された作品ではないということです。

いかに世界観を表現してゆくか？という事に苦心し、漸く生まれ出るのでありますが、世界観を打ち壊された作品も数多くあるでしょう。プレビューなどで、燦々たる結果を書き綴られた作品もありますし、人気俳優に支えられ、それだけのタメの映像作品となったものも、数多くあります。

それだけ、世界観の再現というのは、大変難しいのであります。

作家そのものの慣習がある場合は、ある程度その再現は可能でしょうが、再現したものが必ず素晴らしい作品となるかは、その人のセンス次第であります。

それで、こういうチョイスが生まれます。

映像にしやすい作品像。受けやすい作品やキャラクター。コスト削減に大きく貢献してくれますし、サブカルチャーに発展しやすい作品などは、別の収入源も考えられます。

商用化という意味では、確かに重要だと思われませんが、それを見込んだ作品の制作は、確かにプロの作品では有りますが、作家の個性を遺憾なく発揮出来ているのか？と、疑問に思います。

このベクトルが全てだとは思いませんし、面白い作品は本当に面白いと思います。

あくまでそういう、思考方法が存在しているということであり、どこに作品の売りを求めているのか？作家の意図がどこにあるのか？と、そんな位置づけで有ります。

でですね。

ここに、プロの審査員の指標が入ってしまうとですね、自ずとその人の気に入った作品が、販売傾向にあり、勿論出版社によって、傾向は異なるでしょうが、結局狙えない作品は、一円たりとも収益を上げることが出来ないという、至上になっており、非常に閉鎖的且つ閉塞的になっているのでは？と思っているのです。

何度も書きますが、ただで面白い作品が読めれば、それが一番の儲けものなのです。

だから、結局ただのものに流れると、売れるはずのものが売れなくなる。

力試しをしたい作家は五万といし、表現場所は無尽蔵にある。だが、利益にする場所がない。だから、ただで公表する。有料コンテンツにすることにより敬遠される可能性もある。

自画自賛の作品をいくら自らプロデュースしても、誰もそれを本気にしない。

ステルスマーケティングの横行は、そういうジレンマを埋めうる手段となってしまったわけで、本来本当に正しい評価を失ってしまったという事になる。

何故か？というと、レビューを書く人間には、全く利益がないからだ。

更に書くと、著名なレビューを得るために、そこへ資金が流れ、レビュー本来の意味を失う結果となる。

著名なレビューが指標となり、それが面白いという結論にすり替えられる。いわゆる影響力だ。

これは評価しないベクトルの切り捨てになり、埋没してしまう結果となる。しかし、至上には、フリーの興味深い作品が多く存在し、同時に未完成のスクラップも多く存在し、それらが一所に、混沌と存在している。

勿論著名なレビュワーがそれを評価すると、閲覧者も増えるが、それでは利益にならず、所詮作品の配布に過ぎない。だからこそ公平にレビュワーが存在する、デジタルコンテンツのサイト構築というものを、

考えている。

勿論未熟な思考である。

しかし、自費出版のような無様な形で、作品を世に出す事は、決してあってはならないと思う。これは作品を世に出すという手段としては、有ってはならないと、思う。

勿論。卒業アルバムのようなものは、出版社に制作依頼を頼むが当然であり、自費出版そのものが決して否定される訳でもないが、俺が此処で言いたいのは、創作作家として文章を書く者が、社会に作品を送り出したいがタメに、大枚をはたいてはならん！と言うことである。

しかし、多くの作家は、表現する場所のみの、模索に徹し、新しい販売ルートの方法を模索をサボっている用にも見える。

勿論、著者も、書くだけ書いて、そういうサイトを構築していないのだから、同じ穴の貉と言えようが、少なくとも、方法論は提示した。

この書が完成する方向に向かえば、ツイッターなので、宣伝し始めよう。

沈黙は金だと言うが、このままでは電子書籍やデジタルコンテンツというものは、一部の受益者のための囲い込みのために、こぢんまりとした者となり兼ねないとは思った。

少なくとも、携帯電話の音楽市場のように、購入したはずのコンテンツのために、重複した資金投資という状況も作りたくないし、一見それが、制作者のためのような錯覚を覚えさせ、実は販売サイドのみのルール作りには、ならないようにしたいと思う。

投資に対して、価値観を見いだせなくなった視聴者が、YouTubeにおける視聴に切り替えたりしたのは、結局さほど高くないクオリティの音質に対して、幾度も料金を払い続ける結果になったり、クオリティに対する価格設定を、携帯電話用という、妙な付加価値のために、ふくれあがった価格帯に飽きたりしてしまったことは、一つの事実としてあるだろう。

今後のデジタルコンテンツがそんな、つまらない付加価値のために、無駄に高い料金設定をされないように、したいものだと思う。あくまでも、作家やクリエイター、アーティストのための料金設定が出来るようにならないかと、考える。

結局宣伝力はどのようにするのか？

結局宣伝力は、どうすれば良いのか？ということになる。

唐突なようだが、そこが結論であり、それがなければいくら環境が整ったといっても、人知れずサイトが立ち上がっただけに過ぎない。

一つは、現在このブログを書かせてもらっているような、メジャーサイトの変貌をを展望として願う事が一つ。

ポータルサイトが、そういう方針を加える。

新たに、クリエイター達が募る。

個人が作る。Facebook や Twitter がメジャーになったかのように、広めていくか？という、方向性になるのか、実はこの部分が尤もキモであり、そういうコミュニティというものの必要性を感じている。

このブログを書いている時点での、ダウンロード数は9、閲覧数が69。

少なからず友、電子書籍の変貌に対して、熱望している人たちがいる。もっと著名なブログも存在しているはずだが、それでも書き初めて、三日、掲載されている総トータルの文庫数から考えれば、なかなかの検索数だと思われる。

何より大事な部分は、資本力と、信用だと思われる。

結局最初はフリーの著書から始めるしかないのだろうか？と考えるところである。

技術力と資本力というのは、実際著者のボトルネックとして、尤も大きな要因である。

ただ、仕組みを理解して、これがビジネスチャンスだと思われる方がいれば、幸いだと思う。

セコイ話、このアイデアでロイヤリティくらいは、回収したいなどは思っているが、世の中出した者勝ちなので、それはシビアな戦いになるだろう（汗）

何度も言うが、沈黙は金だという。本来こういうアイデアは、自分で形作るべきなのだろうが、どうも日本の電子書籍というものが、単なる出版社の出版物と同じ扱いになりつつあるので、書いた次第である。

残念ながら、現在の著者には何の後ろ盾も存在していないのが、現状である。

単純な構図（随時更新……予定）

流れ図

クリエイター（制作サイド）

↓

サイト

↓

レビュワー（販売サイド）

↓

購入者

単純な構図

クリエイター（作家）

1. 創作活動
2. 販売価格の設定
3. 利益の設定
4. レビューの配当設定

1) レビュー数 = (販売単価 - 利益 - (販売単価 × サイトへの配当掛け率)) ÷ 配当単価

例) 500円の著書で200円の著者利益、配当単価5円、サイトの利益が10%とする

$$\begin{aligned} \text{レビュー数} &= (500 - 200 - (500 \times 0.1)) \div 5 \\ &= (300 - 50) \div 5 \\ &= 250 \div 5 \end{aligned}$$

$$\text{レビュー数} = 50$$

この作品には、50人のレビューを設定することが出来る。

配当単価が低ければ、低いほど多くのレビューを募集することが出来るが……。

2) レビューの配当は、同作品のレビューから、その著作物が売れたとき。

5. レビューが存在しているときは、直販だとしても配当金が発生する。

6. 著名な作家となれば自主運営となる可能性が高いため、多くのレビューを必要としなくなる。

サイト

1. クリエイターの募集

- 1) クリエイターのページの設置
- 2) 著作物が当人の者であることに対する、規約遵守への署名

2. サイトの宣伝活動

- 1) 当然だが、サイトそのものの知名度がないと意味が無い

3. レビューの募集

- 1) レビュー用のページの設置

4. サイトキットの必要性

- 1) ブログへのリンクなどの必要性
- 2) Twitter やメールなど宣伝自動発信機能

サイトに登録しているユーザーには、当然著者や作家に対する、

自動お知らせ機能を設定することが出来る！などの販促手段が必要。

レビュー

1. クリエイター（作家）サイドからの、著書購入
2. レビューの作成
3. 宣伝活動（Twitter による、新書入稿のお知らせ！など）
4. 著名となった作家な自立の可能性が高いため、作家の新規開拓が必要となる。
5. サイト内での販売総数が利益となり、100 人の作家の本を 100 冊が全て 5 円の配当である場合 5 万円の歴となる（ただし、税金などの関係から、手数料は引かれるものとする）

電子書籍の夜明け

とあるニュースで、電子書籍の夜明けはまだ遠いのか？というタイトルがあった。

確かに電子書籍が謳われてから、可成りの時間が経つが中々、広がりを見せない。

一つはまず、間違い無くフォーマットの普及だと思う。

OS もそうだが、やはり統一性というものが、必要であり、アレではこれが出来ない、コレではあれが出来ないという、状況が、二の足を踏ませる。

書籍リーダーは、何でもいいが、コンテンツはしっかりしなくてはならないというのが、第一条件。あとはお気に入りの操作性ということか。

Microsoft の windows が、不満を多く抱えながらもこれほど普及したのは、間違い無くマシンを選ばない環境作りというものに、成功したからだろう。

その代わり、パーソナルコンピューターの個性というものを奪い去ってしまったが、これはある意味メーカーのエゴであり、日本の戦略負けと言えるのは、間違いの無い話。

結局、帯に短したすきに長しという状況と、専門性やネームバリューを盾にした、非道い囲い込みと、ソフトウェアのコスト負担を、ユーザーに求めすぎた結果、どれも伸び悩んだという結論に至る。

自分たちの独自性を盾に、怠けていた結果だと、言うことではないか？

要するに、今の日本の電子書籍というのは、コレと同じ事をやっているのである。

出版社が、PCメーカーと例えられる。ハードウェアは、まあ Android、iPhone、PC、Mac、コレまでの携帯電話。

iPhone、Android、Mac、pc は、それほど大きな隔たりはないし、

メールアドレス埋め込みで、閲覧制限を掛ける方法もあるだろうから、viewer でそれが管理できれば、もうそれで居いいんじゃないか？

まあ実際 viewer に関しては、もう少し、各社の独自性というより、ユーザーが困らないように、周知してほしい。各社の思惑で、自分たちの抱え込む書籍のための viewer ではなく、電子書籍を広めるための viewer だ。

どういうものが、有って良いのか、どうしたいのか？ただし、それは利益の抱え込むためではなく、初期段階として、新しい方法論の模索としての検討である。

あとの書籍の内容のクオリティは、まあ……それぞれ有るだろうけど、結局使う側が、電子書籍の構造が今一解らないままに、電子書籍になりました！便利ですよ！みたいな。

それよりも、このリーダーは、どの書籍でも利用することが出来ます！という、普及がね。

実際フリーのリーダーでも E P U B 3 対応と書いて在っても、全然使い物にならないものがおおい。

俺が気に入っているのは、シェアだが AIR 草紙という、PC 用の viewer だけど、結構良く出来てて、一太郎で作成した E P U B 3 も、それなりに綺麗な表示をしてくれ、文庫としての体裁も、それなりに守ってくれている。ただし、一太郎の具合のせいか、段落の文頭が一段下がっていなかったりと、まあそこはね、これは一太郎側が、インデント処理をしてきていないのか？と思ったりもする。

余談でした。

今では、ブログを書いているパブーさんのような、サイトにあるように、書き物を行う人たちにとって、有用なサイトも増えましたが、やはり、日本の文庫は縦書きであるというのは、フィーリング的に大事何のだろう。

一番いいのは、見開きで読めることが望ましい。

そして、ただの文章ではなく、行替えのタイミングや、空白の在り方など、文体そのものの考慮なども有っても良いとおもうのだ。

結局ただ単に、文章を提供するのではなく、文体の表現まで提供できる状況というがあって、高いクオリティが生まれるのではないかな？と思ったりするのであります。

作家が生み出した表現の正確な媒体が求められると同時に、ユーザーが気にしない、透明感のある提供。まあ viewer になるんだが……。

あと、わざわざ、フリーの作家を排除するような、流れにならないことを願うばかりだな。

電子書籍を生み出すには、出版社と提携しなければ、求めているクオリティが発揮出来ないとか、そういう縛りが無いように願いたい。

結局そんなことばかりをしていると、フォーマットの普及が進まないばかりか、孤立化が進み、結局世界と共通したフォーマットをもてなくなる。

そうではなく、日本で発信されたフォーマットを利用することによって、作家が幸福になれば、自立した作家はそのフォーマットを利用して、独立した利益を上げるし、信頼されるフォーマットとなる。

フォーマットの利用権は、オープンだが、ソースに関しての更新権利というのは、開発した一社による、純然権利である。windows も Mac も、一つのフォーマットとみれば、購入こそしているが、そういうことになる。

販売におけるロイヤリティを、僅かに徴収するようにすることも可能だろうし……などとも思う。

結局どれだけの人間が、電子書籍の制作に対して、積極になれるかと、いう部分にかかっているんじゃないだろうか？

恐らくフリーの作家ほど、低予算で幅広く公開するために、こういうものに、関心があり、出版社に囲われている著名な作家ほど、あぐらをかいてたりするんじゃないかな？と思ったりもする。

自分の構図を他人に押しつけられるか、そうでないか？という部分でも大きいと思う。

下品な話ではあるが、VHS デッキを持っていれば、より多くのアダルトビデオが見れたというのは、ベータの敗因ともされる所以かもしれないというのは、有名な話だったりして……、メーカーは VHS の映像を世に排出する。配信会社は、出版社と同じだが、デッキは、各電機メーカーで、基本性能は変わらないが、操作性などで大きく競った。

テープを買うことに関して、ユーザーが悩むのはその内容だけである。

アマゾンで購入しようが、Kindle で見ようが、iTunes で購入しようが、Android で読もうが、専用アプリではなく、サイトでさくっと購入して、さっと持ち出せて読める。そういう流れをいかにスマートに作り上げるか……なのだと思う。

そして、viewer が変わっても、安心して読めるということ。

随分もっさりかいてしまったが、やっぱり日本人には、縦書きの文章。これが、さらっと配信できないようじゃ、日本の電子書籍の夜明けって、まだまだだねー。

レビューと煽動

と……少々過激な書き回しではありますが、レビューというのは非常に大切なモノであります。著者が文中に書いている、大雑把な仕組みではありますが、レビュワーという存在を取り上げました。

レビューには、色々ありますが、主に有償レビューと、無償レビュー。いわゆるプロとボランティアと分けられるのですが、基本プロのレビューは、作品の見所など、序盤のストーリー展開など、特にCMなどは大がかりな作品のレビューだと言えます。

様々な要素はありますが、基本的には作品を売するための宣伝が、やはり有料レビューでしょう。番宣などもそういう部分に含まれると思われまして、テレビの場合であれば、同局内の他の番組を宣伝するといったことにもなるでしょう。

まあ番宣を重複して書いているのですが……。

こういうレビューは、売るために書かれているものだし、当然良い要素を取り上げることが屢々ですし、わざわざ実は面白くないんですよ！などと、言うはずもない。当然である。

一方無償レビューなどは、ほとんどがユーザーレスポンスといった具合になってくるのではないかとおもいます。

勿論紙面によっては、すさまじい酷評を書いたりもします。こういうのは、まあ少し無償では言いがたいですが、無償レビューは基本三者三様で有ることが、通常です。

何を当たり前の事を書いているのか？と言うことですが、要するに売りたいものに対して、無償レビューがつくということは、そういうことです。

尤も、最近では掲示板などが、多種多様に存在し、様々なスレッドが意図せず乱立している時代であります故、こういう無償レビューは、正直あえて、販売サイト自ら立てる必要も、正直ないのかな？とも思ったりします。

勿論、製品改良にあたって、無償のユーザーレビューは、製品の改修点になり売りますので、企業としては求めたくなる重要な要素となるわけですし、売れる作品を求めるクリエイターにとっては、それもまた一つのリサーチとなり得ると思います。

売れるためのプロになるなら、恐らく今までの市場で活躍すれば良いのでしょうかし、そうすれば良いと思います。しかし、独特の世界観価値観を自らの糧とする場合、実は無償レビューに振り回される訳にもいけません。

否定はしませんが、最近の腐女子におけるBLの在り方や、美少女好きのための多くのサービスカット。

まあ需要だから本当に否定しませんし、著者もなんだかんだいって、女の子は可愛いことに越したことはありませんし、絶対ありえないだろう！wwといいながら、そういうのを頼んだりもしています。

やはり男ですからね。映画だってそうです、きりっと締まった美女が、ぱっちりアクション決めた瞬間などは、かっくいいな！と思ったりもするわけですから、当然そういう需要を抑えるのは、大事な要素と言えます。

この著書では、だいたい今ある出版社に対して否定的な文章を書き連ねているのでありますが、そろそろそうでない方向で、様々な出版物が世に出ても良いのではないかと考えており、現在のところ、作家やクリエイターにおいては、小商にこそなれ、広がりがないという点において、やはり多くの作家が蹂躪されているのではないかと、そういう流れから、今回のこの文章であります。

「レビューと煽動」というタイトルではありますが、実際「レビューは煽動」と言えるほど、宣伝活動は、やはり相当偉大なのであります。

バンドなら、ライブという手段があります。

多くのバンドが集まったとしても、たった数分であったとしても、そこでは自分たちだけの時間があります。まあコミケなどもあり、作家さんの場所もあるようですが、やはり少し違う気がしますね。

音楽は能動的で、文章は受動的なのです、誰かが目を通してくれるまで、内容は伝わりません。このあたりが、より閉鎖的な世界になっているのかな？と、思っているのです。

いま考えて居るコミュニティや、サイトはまさにこういった、作家と宣伝側の繋がりを円滑にしつつ、両者両得であれば尚いいという、そういう考えで構築し始めました。

売るためのレビューは、無責任でいられないのです。売るためのレビューを書く必要があります。極論を言えば面白く無いモノを、面白いと書く必要があるということです。

それでは詐欺？という事になるのですが……ようは見所を書くということですね。

いかに多くの作家が多くのレビューを受け、レビュワーは、自分の為に、いかに多くの作品のレビューを書き、多くの作品を買ってもらうか。と言った具合なのです。

ただ、アフィリエイトのように、一人が一人のための利益を得るために、サイトに訪れるための努力を一人で頑張らな蹴ればならないのか？という点も同時に解消しようと思ひ、複数のレビュワーが、連帯的に恩恵を受けることが出来ないか？と、考えました。

現在パブーでは、現時点で二万六千点あまりの書籍が存在しますが、このブログもその一つであり、現在このブログを書いている時点で、130人の閲覧であり、20以上のダウンロードとなっています。コレが多いのか少ないのか解りませんが、日々少しずつ伸びていることは確かで、電子書籍の夜明けに対して、待ち望んでいる人がやはりいるのだなと思いました。

書籍好きが書籍好きのためのブログを書き、書店となったそのブログから、本が売れてゆくとなると、この本面白いよ！と、言う甲斐もあるのかなー？と。

今は、サイトと作家のみの関係となっておりますし、あとは自分の宣伝力次第ですが、やはり客観的な要素としてのレビューは、非常に大事であり、誰かに宣伝されるということは、単なる自己満足のための作品作りとは、また一つ異なるものだとも思います。

新しい本が出来たよ！と、作家自らが発信するその自己満足が宣伝になるのは、やはりそれなりに著名になった人たちの特権であると思いますね。

自らのファンを獲得することを怠ってはいけませんが、少し、レビューされることの大事さというのを、書きつつ自分の提唱する方法論のプロセスの一端を書かせていただきました。

著作権は、作者にある。しかし、権利を主張するには、証拠が必要だ。

さも当然のことを書いてみる。

著者の周りに、特許に関してシビアな観点を持っている人が居るため、権利がどれだけ大切なのか？という話は、屢々聞かされる。

特許は、作品と違い、ベースなる技術に、他の特許権に絡む事例があつてはダメだというのは、大雑把ながら誰にでも理解出来ることだとは思ふ。現在の Apple と Samsung とのやりとりで、Apple が可成り特許を盾に、Samsung を攻撃しているニュースも多いし、Samsung は Apple の劣化コピーだという話が、世間では常識とされているが、まあそれくらい権利というものが大事なのだという認識は、持っておいた方がいい。

勿論それは、創作者においても重要であり、出版社においてもそれは大事であり、利益を追求するためには、当たり前のことである。

最近では、可成り柔軟な姿勢も見せているが、一般の創作者がどうしても行き詰まるのは、投稿したい作品は、つまり同時に、読んでもらいたいもらいたい作品でもあるし、心血注いだ作品でもある。

しかし、自己宣伝だけでは、どうしても限界があるし、作家が増えれば増えるほど、知ってもらう確立は減ってしまう。それも当然なのだが……。

では、その作品は表に出てはいけないのか？というところ、そう言う訳ではない。しかし、表で野ざらしになっていては、死んでいるようなもので、更に公開している作品に対して、応募の規制を掛けている出版社があり、それがお目当ての出版社である場合、可成りのジレンマに陥るのではないかなと思う。

著者は個人適に思う。

出版社に受からない作品が、だめな作品だとは思わない方がいいし、決してそんな事はない。そして、今はインターネットで、売る事が出来る。

今までは、自分が作りたいサイトの話なども少し書いてきたのだが、此処では少し視点を変えて考えていきたいと思う。

ここでは、その出版社が望む形式や流行の作品であることか、作品の狙いに対しては、一切書かない。

勿論著者も無名なので、そんな事を書ける訳もなく、書いたところでなんの説得力もない。

ただ、順位付けは出来る。

お目当ての出版社（規制が厳しい）→お目当てでない出版社（規制がゆるい）→三巡目以降、現行の再確認まで含めて、一通り出してみる→お蔵入り

同じ作品を二度送って通るか通らないかとかも、考え得るだろうが、投稿を夢見ている人ならば、それなりのストックもあるはずで、世に出したいがために、見直し尽くした作品もあるに違いない。

ストックを二つ用意する。いや三つか。勿論ストックは多い方がいい。

多くの投稿作品は、恐らく投稿用のために、短編でまとめられており、起承転結をはっきりさせていることだろうと思う。なので、正直持続力のない作品になっているのではないかなと思う。

しかし、お蔵入りさせてあきらめてしまうくらいならば、それを出版してしまえばいいじゃないかと。

受賞も選考にも引掛からない作品＝だめな作品＝受けない作品という訳ではない。ただ単に選考基準から漏れて選ばれなかつただけに過ぎない。

勿論出版社側はプロなので、目は肥えているし、素人の朝次絵なんかよりも、ずっと具体的で現実的なものを見ている。だが、それは出版社として利益を出せるか？という視点であり、売れる作品の視点であり、書き手側のマッチングとも言える。

賞をもらうと言うことは、個人にとって望ましいことでもあるし、励みになるし、目指すところではある。なのでそれはそれで、新しい作品を書き続けられればいいだけのことで、埋もれさせてしまう必要はない（何度も書くことだが）

だれが、どこの馬の骨か分からんやつの本など、有償で買うのか？とも思うが、そこは最後に、無償公開にまで落とせばいいと思う。

自分の作品群は、巻末にリンクでも張ればいい。そこが、デジタル書籍の良い部分である。リピーターが着けば、自ずと、自分の作品も探してくれるだろう。

落選→有償公開→無償公開

こんな順番だろうか？

あえて汚い発言をしてしまうと、売れてしまえばこっちのものである。要するにそういうことなのだ。ただ、今その手段として、尤も有力なのは、出版社によるグローバルな宣伝効果と、受賞によるネームバリューである。

しかし、それらはやはり、売り手側の基準であり、売り手側のルールに縛られたモノなので、先ほども言ったが本当にマッチングだと思う。

何度も書くが、勿論、この作品面白いな！と思うのだから、当然本当に面白いと思われて世に送り出されるのだから、決して否定してはいけないと思う。まあ色々書いたが、やっぱり書き手は書き手をリスペクトしなくてはならない。

とまあ、作品の賞味期限をどこで切るのか？と、自分で決めればいいんじゃないだろうか。

受賞して売れた作品があれば、それを宣伝力に、自分の書きたい本を電子出版すればいいし、書籍として望む声があるのならば、オファーもきっとある。恐らくそういう時代になっていくとおもう。

以前にも書いたが、本にする価値のある作品が、本になる時代だと。

本にして売らなければならないとか、書籍が書籍であるために、書籍の形状をしている必要もない。

今までが、そうしなければならない時代だったというだけのことである。

iPhoneもAndroidも広がり、スマートフォン時代に突入し、書籍専用リーダーのためだけの専用デバイスを必要としなくなった。

だから、電子書籍のためだけに、デバイスを購入するリスクを冒す必要が、ユーザーにもなくなりつつある。

herdよりSoftの時代だと言われて久しいが、要するに作家も、今までの各版ルートに縛られないように、物事を柔軟に考えなければならず、それと同時に、作家一本でいけていける時代でもなくなっただろう。

しかし、それと同時にある程度、生活のための仕事と、生きがいのための仕事の、両立とというのが、今後の作家の道なのかな？とも思う。

いや、今でもほとんどの方はそうされているのかもしれないが、作家が増えたと言うことは、メガヒットも難しくなるだろう。

何故か？それは経済のパイが小さくなったから何でもなく、チョイスの幅が広がったからだ。

分かるだろうか？選択肢が広がると言うことは、補正を書ける幅が少なくなるということで、ベストマッチを見つける可能性も出てくるということだ。

これは、人間のフィーリングが補正を掛けているからで、作品が少ないとその中で補正を掛けるが、多くなるとその中で補正を掛ける。しかし、収入はそれほど劇的に変化があるわけではないし、時間に関しては、二十四時間と、固定されてしまっている。

まあ諄いようですが、その中で、出版に対するライフスタイルと選考が、今までの在り方で、そこに付き従わなければならない現実というものも、なんだかナンセンスだと、まあ、そういう結末になるのでありまして、受賞出版を目指す方々も、ただ、受賞を逃したから、フリー公開ではなく、有償公開も含めて、受賞しなくとも認知される作品の公開方法と、生活の設計に加えられるような方法論を、模索してみませんか？

特に、未来のある若い作家さんには、これからの時間を生かして行ってほしいものです。

意識の改革？

このブログは、基本的に創作作家のために書き下ろしています。

やはり作家そのものも、自分がどういう展望で書籍を売ろうとしているのかという事を、考える岐路に立たされていると思うのです。

前回も書きましたが、作家→出版社→販売網、というこれまでの流れは、紙面媒体に他与良猿を獲なかった現実から生まれた各版ルートであり、賞を取った後、自分はどうしたいのか？という展望の問題です。

受賞する作品は、何千何万と贈られてくる作品群の中の本当に一握りで、ではそれ以外の作品は売れてはいけないのか？売ってはいけないのか？という訳ではないし、勿論売っても良いと思うのです。

ですが、当然書籍にするリスクは、印刷加工代、販売スペースの確保が存在し、結局個人で書籍をさばくなど、不可能な、現状がありました。

ですので、電子書籍の誕生というのは、そういう個人販売に対するリスクというものを、一気に軽減させてくれるものとなりました。

しかし、知ってほしいがために、無料化書籍が増え、発表の機会が増えるにつれ、買わなくても読める。そして、思いの外斬新な作品もある事を知ると、お金を出して損をするよりという、感覚に囚われがちになります。

そうなる、受賞のための単発作品を書くのではなく、長編作品の方が遙かに有利になる。

人気が出たから連載作品へという流れではなく、最初から長編作品を書くつもりで、複数のストックを書きためる方が、これからの機会は有利になるのではないか？と思います。

勿論、ページ数限定公開などの設定もあり、作品との接触の機会も存在しますが、やはりある程度のボリューム確保というものは、必要になってくるでしょう。

まずは自分の宣伝力をつけるために、作品を知ってもらおう。残念ながらこの部分は必須作業になると思われれます。賞を受賞するという事は、それだけで宣伝力となるのですから。

ですが、賞の取れない作品、イコール、売ってはいけない作品、売れない作品、ではないということです。要するに販売の機会を失っただけのことです。

勿論、賞を受けた作品というのは、より素晴らしい作品だからこそ、受賞されたのだということは、同じ作家として、リスペクトすることは、忘れてはいけません。

自主販売した作品は、応募要項に引っ掛かってしまうのですから、応募を目指す人は、自ずとその作品をお蔵入りさせざるを得ないという、現実には直面します。

勿論、商売の世界ですから、自らの不利益になる方法論を、許すわけもないのですから、自主販売というのは、自ずと出版社の利益を搾取する事二なります。

しかし、基本的に、著作権法として、自主販売の規制があるわけではなく、売ってほしいなら、自主販売はやめろという、そういうことです。それを、当選前の応募作品に当ててくるのです。

勿論、選考帰還中のみ、販売停止という所もありますが、いずれにせよ、0.02%程度の当選確率のために、数ヶ月も、作品の表現機会の喪失を強いられるのか？と疑問もありますし、一つの作品を、時期を外して、複数の賞に応募させるということもありますので、期間にして、相当に作品の封印を余儀なくされます。

まだ、公開するかどうか決めていない作品に対して、版權に対する要項を盛り込まれているのと、全く同じであり、他の出版社との契約と、サイトを利用した、自主販売というものは、区別されるべきだと思います。

勿論、トラブルを未然に防ぐために、作品の事前公開を避けるということもありますが、正直販売のための作家に対する、締め付けだったりとも思います。

まあ、なんのために賞金をを出してまで、作品の応募を募っているのか？という事を考えれば、当然のような気もしますが、やはり、この作品を売らせてほしいと、立場の平等化というのは、どうにかならないものか？と、思っています。

環境の変化、機会の変化、体質の変化、ビジネスモデルの変化、大型書店の集中化、小型書店の縮小傾向。書店の大型化が進み、小規模書店の縮小傾向、足を運ばなければ、本を探せなくなった現状と、インターネット販売の充実。書籍の多様化、物量の肥大化。

この中で書店で書物が売られる事に対して、変化が少ないとすれば、書籍の刷新と流通経路、の二つでしようかね。あとは、宣伝力。

誰もが面白いと思う作品を手にする、安心感から得られる傾向。

自分で探して、面白いと思えるものに向かうことが少なくなった。

映画などではよくありますが、前評判ばかりで、実際面白くなかったという作品もあり、そういう作品に対しては、映画館もシビアな対応を取りますが、一度発行された書籍というのは、この世に存在し続けますので、事情は違いますが、自然消滅する傾向にあります。

まあ絶版というのがありますが、結構人知れず消えてゆく書物も多いことでしょう。

電子書籍というのは、そういう絶版で起こる、機会喪失というのが減り、一つのチャンスだとは思っています。

賞というのは、面白い作品を書くための励みであり、創出機会喪失のためのものではあってはならないのでは？戸も思い、今回このようなブログを書かせていただいた次第であります。

短編よりも長編？

多分、幾度か重複した内容の話題を書いていることとなりますが、今回は電子書籍を中心に書き下ろすフリーの作家と、受賞作家との作品構成には、やはり事情が異なるのだという事を中心に、書き綴りたいと思います。

勿論、質の良い作品が書けるほうが良いに決まっているし、受賞できる作品というのは、実力が前提なのですが、受賞できなかった作品に力がなかったという訳ではない。一步及ばなかったという視点も有りますが、受賞した作品が、全てヒットしたという訳でもありません。

では、受賞しなかった作品は、そのヒットしなかった作品より、全て質の悪い作品なのか？という、決してそう言う訳ではない。

というのは、少し前に書かせていただきました。

受賞できなかった作品を公開するに当たって、公開するにあたり、少し待ちましょう。

というのも、一羽完結型の応募作品というのは、やはり一話限定であり、それきりだからです。つまり受賞するために書いた作品であり、受賞前提で宣伝効果を見込んだ作品作りになっており、フリーでの公開においては、その宣伝力も高いものとは言えません。

いくら、ブログやツイッターで宣伝したところで、読者が少ないと結局、時間が経つにつれ、作品はどんどん過去の者となってしまいます。

連載にとって大事な事は、一定のペースでこまめに更新すること。

コレがやはり大きな条件の一つであると思います。

自分を知ってもらうために書く、フリーの作品。

自分の収入とするために書く、販売目的の作品。

勿論、一話目を無料の作品にして、二話目以降を、有料作品とするケースもありますが、自分の作品を知ってもらうための作品を書くことが第一でしょう。

少なくとも、準備のために二つの作品が必要ですし、ストックを作ってから、配信するようにしましょう。

ホームページやブログへの誘導も大事ですが、せっかくの電子書籍なのですから、巻末か巻頭へのリンクも、忘れずに。

続きを読みたいと思わせる作品作りを心がけるのも当然ですし、何より持続的に配信する力が無いと、購入意欲に繋がらないでしょう。連載を心待ちにしている、読者をいかに増やすか？という部分を考えると、コレまでの、受賞して、出版社に作品を売ってもらう作家のスタイルや、受賞に対するネームバリューを利用しての、独自配信などとは、やはり違ったアプローチが必要となります。

そして、受賞についてですが、作品については、何だかんだと内容やタイトルを覚えておりますが、著者に対してどれだけの思い入れを持って、読者が購入しているか？という部分を考えると、ビッグタイトルの著者でさえ、数年経てば、作品名すら出てこないことも屡々というのは、恐らく筆者で家ではないはずで。

あの有名なハリーポッターの著者はだれ？と言われて、どれくらいの間が解答できるのか？というくらいに、やはり作品ありきの著者だということになってきます。

作品タイトルのインパクトなどは、恐らく他の方々も書かれておられるでしょうから、此処では割愛します。

シリーズを通して購読したくなれば、それだけのロングランが望めますし、宣伝効果も望めます。勿論よい作品作りを怠ることは許されませんが……。

なので、落選作品をいきなり表に出すよりも、まずそれらを読んでもらうための下地作りも行いましょう。実は著名になったからこそ、出せる作品というのものもあるわけですし、ネームバリューが作品の価値観をひっくり返すこともごく当たり前に思います。

まずは、無償で公開しても良いと思える作品を思い切って作ること。

応募したい作品は、それで割り切って作ること。

将来自分が本当に連載したい作品の構想を練ること。

とまあ今回は、短めですが、あえて受賞だけが、作家の美知ではないし、受賞を通さない作品は、捨て作品ではないという事。また、持続した公開活動こそが、無冠の作品作りは、こうした方が良いのでは？という提案でした。

電子書籍専用ハードは売れるのか？

スママセン。今回はタイトルは、いかにも、予想師みたいな事を書いてますが、今回ばかりは流石に経験を殆ど伴いません。

ただ、個人敵にはあまり専用ハードがほしいと思わないです。

勿論電子書籍を作成する側としては、有っても良いアイテムだと思うのですが、正直これだけのために、一万円近くもどうかと思います。

スマートフォンで十分な気がします。

確かに、書婦非電力の問題もあるので、スマートフォンでは、長時間読書するには向いていないし、発光しているので、実は、目には余り良くない。昔から言われて居ますが、テレビなどの電子画像は、やはり思っている以上に疲労するようです。

E-I-N-Kは、発行紙続けているわけではないので、目には優しいようですし、非常に省エネだと存じております。

俺が危惧しているのは、電子書籍専用フォーマットとか、変な囲い込みを作ってしまうのか？と、そういった部分であり、フォーマット普及に努めるつもりがあるのかどうか？というところですね。

飽くまで、画像を含まない、テキストのみのEPUBは、非常に軽いフォーマットであり、PDFとは比べものにならないです。画像は飽くまで画像ですので、コレを小さくすることは、画像フォーマットに依存することでしょう。

今のところ、フォーマットに対する縛りは、あまり見られないようですが、日本の出版社なんかは、余計な事しなけりゃいいなと、正直思っています。

パソコンでの電子書籍というのが、あまりピンと来ないのは、本を読むという動作と、あまり直結しないからではないか？と思う。

ブログを見るなどなら、パソコンで見るという刷り込みがあったりなので、見に行く姿勢に抵抗がないと思われるが、書物を読むというのは、シチュエーションもあるが、基本的に本の世界に没頭したいので、好きな姿勢で読みたい者だろうともおもう。

つまり、パソコン（少なくとも Desktop）は、姿勢を強制してしまいがちである。コレは本を読むという感覚に浸れない。ノートパソコンも何気に、ファンの音がうるさかったり、本というサイズでもない。

漸くタブレットがそれに近いだろうか？などと思うがとんでもない。

片手で支えるにはあまりに重たい。ある程度の自由は得られるが、それでもまだまだ。

スマートフォンサイズは、少し小さすぎる4インチのスマホなら、まあどうにかなるかな？

後はやはり、本のように開く感覚があれば嬉しいけど、それは流石に少し言い過ぎか。

それでも、恐らく電子書籍というものが、伸び始めたのはやはりスマートフォンのおかげではないか？と思う。

両手で広げる事は出来ないが、片手にすっぽりと収まり、重量も許容範囲だ。

今までのフィーチャーフォンでは表現しきれなかった、ページの構成や、文字のサイズなどもあるので、そのあたりのパフォーマンスが、やはり重要なのだらうと思う。

EPUB2あたりで、携帯電話でも読めるフォントサイズで、横書きで、表現されているが、正直言って雰囲気が出ない。

内容を読むことが出来るだが、それは内容を知るための文字列であり、ストーリーを得るための文章ではあるが、

ページ全体の雰囲気をあからさまにぶちこわしている。

正直コレはいかがなものかと思う。

文庫なんかはそうなのだが、やはり文体と空白のワビサビというものがあり、ただ表示できれば良いというものではなく、実は、一行に収まるインパクトを必要とする文章が、二行にわたってしまったりなどは、これで実になかなか間延びしてしまうのである。

文章を読める事も大事なのだが、やはり文体そのものの表現力を損なうようでは、この先も電子書籍の文庫ののびってのは、限界があるなと思う。

タブレットでは寧ろ、漫画はいいと思った。週刊誌は重たいのである。何よりかさばるし、弱い。ポロポロになってしまう。

小説とは違い、一ページを見渡す時間というのは、やはり一般的に短い。だから消費ペースは明らかに、漫画の方が早いし、安価な紙面に印刷された漫画が、作者の意図した表現に至っているのか？と思うと、全くそうではないだろう。

今までそれに慣れてるし、コミックになれば、寸尺が小さくなり、原稿表紙で表現していた細かい部分が潰れる可能性もある。一ページの酒家時間の短い漫画は、繰り返し読まれると、やはり痛みやすい。

勿論どの本も痛みやすいのだが、絵を楽しむことが含まれる漫画は、やはり画像のクオリティも保ってほしいとおもう。

まあ、読めれば良いという意見も多いだろうが……。

話が逸れまくる。毎度か……。

楽天の発売した電子書籍専用端末の売れ行きも、まずまずのようで……。これはコレでめでたい。だったら、本稿のタイトルはなんなの？と言うことになるのだが、やはり売れるためのプロセスってものがある。

スマートフォンで浸透し始めたからこそ、こういうハードに注目が集まったのだと思う。

勿論価格的なものも含まれるのだろうが、それにしても単なるブックカバーと考えれば、この価格でもまだ高い。ある程度マルチに使えるものであってほうが、やはり気が紛れる。

消費電力の問題もあるため、機能の大盛りは避けるべきだとは思いますが、逆に考えて、スマートフォンの電池が劇的に伸びてしまえば、専用端末の意味は無くなる。

じゃあどうやって、電池伸ばすのだ？と、いうところがネックではあるが、相対的な技術の進歩で、徐々に改善されてゆくだろう。その線引きはいったい何日なのか？という問題もあるのだが、二週間程度保てば、どうだろうか。

勿論電話も出来るしネットも出来る。そんなことがあり得るのか？とかもあるが、

アイテムとしては、今までの液晶の上に、E-INKディスプレイを統合したディスプレイで、書籍専用モードなどがあれば、消費電力を抑えられたりもする。勿論セルの透過性などの問題もあるので、改善点も多いだろうが……。

今著者が利用しているスマートフォンは、ISO3であるが、半端なく電池の持ちが悪い。何処かで充電する前提で、作られてるゆなものである。シガーライターで充電したり、こっそり充電したり……。唯一これだけがボトルネック。

なので、電子書籍専用ハードが延々と売れ続けるとは、正直到底思えないわけでして、何らかの時点で、急激なシェア縮小を強いられるんだろうなと、思っている次第であります。

日本の囲い込み

この記事は、サイトの構築や展望とか……ではなく、k o b oが未だに迷走しているような記事が書かれたり……なので、何となく書くことにしました。

日本は、どうも囲い込み戦略がスムーズにいったいないようで……。

遠目から見ておりますが、どうも電子書籍にたいして、がっかり感を覚えるような記事ばかりが目立つ。電子書籍に関する記事を書いているのに、電子書籍に対する端末というのは、筆者もスマートフォンくらいしか持ち合わせておらず、実のところそれで十分じゃ？と思っております。

勿論大きさの問題にもよりけりで、筆者のI S O 3では、正直文庫サイズの文字を読むには、少々疲れてしまいます。

これより一回り大きい4インチサイズの、スマートフォンならばもう少し読めるようですし、若い世代ならば、十分読めると思います。

本文に参ります。

まず、E P U B 3に対する扱いが、全く定まっていないようです。

どの程度修正されたかは解りませんが、様々な憶測記事を読ませていただいていると、日本語文書に対するフォーマットの崩れや、意図しない表示などが、ぽつぽつと聞こえて参ります。

どうも、コンテンツ制作イドとハード販売サイドの思惑がかみ合っていないようで、これはハードウェアの問題というより、やはりコンテンツ制作サイドの認知不足というものを感じざるを得ません。

それに、各社独自感の色合いが濃く、一本心の通ったフォーマット作りに話が踏み込めていない気がします。

E P U B 3という国際規格において、縦書き文章のフォーマット利用可能というのは、間違い無くアジア地域の販売網拡大のために、取られた仕様であり、日本独自のための仕様ではないでしょうし、それをどういう風に使用していくのか？というのは、やはり国全体の関わり方だと思います。

結局、電子閲覧コンテンツの取り決めという綱引きがいったいどこで、もたついているのか？というぐらつきが、k o b oの集約されてしまったな……と。

勿論、E P U Bの仕様を網羅していれば、表示における不具合なども起こらないでしょうし、ファイルにおける表示不具合なども起こらないでしょう。また縦書き文章における、拡張子もなんだかややこしい。

見てみると、二重拡張私的な状況になっており、k o b o出見するためには、一々拡張しに気を遣わなければならないし、そもそもファイル形式を理解するための拡張子に気を遣わなければならないというのは、本末転倒であり、利便性に欠けると言わざるを得ません。

個人が制作したアプリケーションではないのに、たった一つのファイル形式に振り回されていると、展望は見えるはずもなく、日本の電子書籍における、熱気は下火になっていくでしょうね。

拡張子で判別し、あとはローダで定義された城意見に従い、結果として表示されるというのが基本であるのに、そのために拡張子に気を遣わなければならないのなら、ほぼ専用フォーマットに等しい。

HTMLとしても、やはり規則に従い書いていけば問題無いはずですし、単純な文章を複雑にしているようならば、それは技術の後退としか言いようがありません。

このままならば、結局ファイルサイズなど気にせず、クラウドに置いた、PDFファイルで制作した書籍を作る方が、制作サイドとしては、遙かに効率的になってしまいますし、PDFの形式はすでに枯れたフォーマットであるため、熟知されているでしょう。

もしくは、縦書きフォーマット用のコンバータと、ローダを作り、オープンソースにしてしまったほうが

楽かもしれません。

囲い込みのためにフォーマットを複雑にするというのは、正直官僚主導の法律作りと、何ら変わらないのでは？とか、少し政治ネタにも絡めますが、こういう部分は、システムの腐敗にしか繋がらないような気がしないでもないです。

どこで利益を得るために何をするのか？という部分に掛かるのですが、windowsやAndroidがすでに、OSの共通化という部分において、先駆者となっておりますし、特にwindowsにおいては、OSの共通化という部分が、ソフトウェア構築に掛かる、コスト削減において、大いに貢献し、また価値のあるものだったため、其所に投資する価値があり、OSの共通化に対して、対価を払う必要もありましたが、今はどうでしょうか？

共通である事がすでに当たり前であり、ユーザーインターフェイスにおいては、シンプルが一番であることは、もう立証されています。コストをかけて専用ハードを導入する時代も、囲い込みのために、多額の投資を行うことを必要とする時代は、もう終わっています。

もし、EPUB3における縦書き文書が頓挫しているのするならば、それにフォーマットは、やはり日本が先駆者となるべきだと思います。オープンソースではなくとも、アプリの無料配布をし、後の拡張体勢に整える……など、まあ当たり前すぎな話かもしれませんが……。

欧米では、文章さえ読めれば良いという、大雑把な思考で、電子書籍を捉えられており、やはり少々日本とはお家事情も異なるようで、フォーマットにこれほど拘るのは、日本だけなのかもしれませんが、やはりそのあたりが、日本の文学だったりするのではないのでしょうか？と思ひもしますし、頓挫する理由の一つなのかも？とか。

といいつつも筆者の国語、古典の成績というものは、正直見るも無惨なものなのですが……。

現在若い世代を中心に少しずつ電子書籍というものが、浸透しつつありますが、これはやはり彼らが、横書きの日本語文章に対して、子供の頃から免疫が出来ており、携帯電話での文章の閲覧に、抵抗がないからではないのでしょうか？

日本の電子書籍のマーケティングがぐらついているのも、絞り込みが明確でなく、妙に老若男女に拘っているからとも、思えてなりません。

ソニー失敗の例に取り上げますが、やはりコンテンツあつてのハードというのが、もう随分前からの常識であり、ハードはソフトを楽しむためのアイテムという認識を忘れてはなりません。

結局インターフェイスにおける独自性での、囲い込みの時代はもう終わっているのです。

必要なのは、もっと内部的な物がいかに優れており、同じインターフェイスを有していても、体感的に優れている物が、より差別的なモノとなりますし、その体感的に優れているものを作るための独自性という、見えない独自性こそが、今後より大きな力となり得るのだと思います。

koboなどは、蔵書数拡大を謳っており、その中に青空文書なども数えられておりますが、これは要するにkoboでなくても読めるので、koboの必要性を謳う理由にはなりません。

koboと楽天の優位点をどこに置くのか？リーダーとしての価格を訴えるのかもしれませんが、前述したように、電子書籍ハードとソフトならでは！というものをどこにおくのか？という点がはっきり見えてきません。

どんなフォーマットでも、どの文庫からでも、これ一台で読める！となれば、自信を持ったハードの囲い込みともなるでしょうが……。

これはアプリ一つで解消されてしまう気がしますね。その導入がいかにシンプルで、安全か？という部分でしょうか。

正直選択肢の一つだね……と、微妙な興味であり、スマートフォンやタブレットの電池の伸びで、解消

されてしまうような部分が大いにあると思われます。

学ぶべき一つには、Microsoft の windows 戦略であり、結局共通の OS 同一条件で提供されるソフトウェアであり、あとは好みの選択という事になり。PC との、連携同期が容易である、管理しやすいフォーマットという事になり、それをどう広めてゆくか？

という部分になり、電子書籍は、一つの端末なわけですから、当然そこに載せる OS の質、この場合電子書籍をフォーマットを再生するためのソフトを動かすためのソフトが OS であり、Android や iOSなどは、まさにこういった物であり、OS で有る。

当然この囲い込みにおいては、Apple、Google、Microsoft (PC との生産性を考慮し、敢えて加えた)により、ほぼ終わってしまっていますが、長期電源保持を可能とさせ、表示能力が限定された電子書籍端末というものについての、OS はまだまだ群雄割拠だと思われますので、いかにソフトウェアの載せやすい OS を積んだ、ハードを発売するか？または Google のように、オープンソースにして、活用してもらうようにするのか？という部分になる。

結局縦書き文章の電子書籍化が遅れているのは、日本の責任のような気がしますし、縦書きに拘っているのは、ひょっとして日本だけなのかもしれない……が。

にしても、日本人が日本の文章を世界のどこへでも連れて行きたいのだとすれば、これは、囲い込みの小競り合いをするのではなく、正直国政レベルの政策になっても良いのではないかと、大事を書いてみたりです。

ですが、書籍好きは思うはずです。

やはり、原文を読むべきであると。

日本の文学も世界に通じているだろうし、世界中の人たちが、日本の文学の原文に触れてみたいと思った時、世界中は電子化され、自由に行き交っているのに、日本の文章だけは、紙で入手しなければ成らなければ、それは日本文化の衰退と閉塞にのがる野ではないでしょうか？

光ディスクには、いくつかの音声モードがありますが、せっかくのデジタル書籍なのです、現地言語と原文言語のリンクしたフォーマット構築なんかも、有って良いかもしれません。

EPUB フォーマット まだ決まらないのか？

ここしばらくですが、漸くEPUB3に対する動きが、表面化されるようになりました。

尤もAndroid 4以降の端末では、閲覧可能なアプリもあるようで、少しずつですが市場が開けてきたように思いますが、残念ながら販売サイトの閲覧機能などが、まだまだ追いついていないようです。

個人的に利用させてもらっているPC用のシェアウェアなのですが、非常に良く出来ていると思われる、ものを一つ紹介させていただきます。

エア草紙 <http://www.memememo.com/u/sato/f1892/>

Android アプリ Perfectleader (PDF 閲覧)

H i m a w a r i leader (EPUB 3. 0対応、ただしAndroid 4. 0以降)

PDF 書き出し BullZIPPDFPrinter (windows 用ソフト)

EPUB3 書き出し 一太郎2012

非常に良く出来ております。

導入方法については、リンク先で確認くださいませ。

リンクの張っていない物に関しては、検索していただくと助かります

普及し始めた……といっても、どうもまだまだ、自社の囲い込みに必死な様子で、これを日本全体や、あるいは縦書き文書における基本的なルール作りという流れまではいっていないようで、それも漸く話し合いが行われている……といった、段階であります。

書いている段階では少々情報が古い状態になっているかもしれませんが……。

結局フリーの作家のための様々なサイトは御座いますが、このあたりの明確な基準が明確にならない限り、まだまだ先は長いようです。

PDFは、フォーマットが崩れることがない代わりに、端末によっては、全く使い物にならないですが、二本の文庫本ので見られる、17行42文字や16行40文字といった文字数なら、小型のスマートフォンでもどうにか閲覧出来ます。

原稿用紙に段組一ページと言った具合の書籍は、閲覧が難しいようですが、原稿用紙半ページである10行20文字ならば、閲覧に耐えうるフォーマットであると思われます。

ただし、PC閲覧を行う場合、原稿用紙半ページサイズですと、非常に間延びというか、一ページにおける文章密度が低くなりますので、読み応えという部分においては、あまりお勧め出来そうにありません。

現状、自分の表現を崩さずに、制作できるという部分においては、やはりPDFの右に出るフォーマットは存在しないでしょうが、どんな端末でも閲覧出来るための、リフポートして推進すべきEPUBがもたついているという現状で、書物としてのフォーマットにおいて、残念ながら、お勧め出来るものはありません。

作品は、著作物でありますので、自己表現をしたいがための無償配布については、よく考えて行う事をおすすめ致します。フリーで表現してもよいもの、取っておきたい物などなど。

公開実験に使いたい物など、用意してから、表現の場を上手に利用しましょう。

基本的には、著作物は作者に帰属しますが、その作者が誰であるのか？を証明するための方法は、著作権

登録という事につきます。

ファイルならば、アップロードのログの提示があれば、その作品の記録日時がはっきりしますので、著作権への証明となるでしょう。

EPUB フォーマット まだ決まらないのか？ 2

日本語 EPUB 3、少しずつ動き出して居るようですが、まだまだといった感じですね。

どうも、各社対応に戸惑っているようです。

実際 Android 2. 2では、縦書きの EPUB 3には、対応しておらず、今後も対応する予定はないでしょうし……アンドロイド端末においては、もう少し世代の入れ替わりを待つしか無いですかね。

あとは、アプリケーション次第ということになりそうですが……。

果たして、現状考えると、採算性取れるものになるのでしょうか？と、少し疑問に思いつつあります。

こうしてるうちに、多分別の囲い込みが出来て、あっという間に使い物にならなくなりそうです。

リフロー型ということで、デバイスに依存しない、コンテンツ配信が可能であるのかもしれませんが、遅れてますね日本、お隣の中国では、可成り積極敵に動いているようですが、また囲い込み合戦に負けることになるんでしょうね、この状態だと……。

俺的には、あまりリフローは、好みではない。勿論期待はしている。

ページレイアウト型の推奨派となりそうである。

リフロー型である EPUB 3は、文章だけならば非常に軽く、コンテンツ制作者にも有利であり、実際一太郎の最新バージョンでも制作可能であるため、単純な物書きとしては困らない。

挿絵などの表現には困るだろうが、こうなるとどのみち、リフローだろうがなんだろうが、画像の表示限界能力という者があるのだから、今拘っても仕方が無いと思うのだが……。

なので、複雑なレイアウトは兎も角として、文章表現者のための、公開場所の提供という概念で、さくっと決めてしまえば良いのである。

横書き文章でも良いのだろうが、日本らしさという拘りを考えると、縦書きでの表現はやはり欠かせないし、文庫感覚というものに対するニーズに、応えられない。

やはり自分の年齢もあるのだろうか、それほど本の虫でもなかった自分でも、縦書きには愛着があり、それが日本らしい、文章の間などの表現をみて、息をのむ瞬間がある。

若い人たちは、メールなどで横書きに対する抵抗もなく、縦書きにもあまり思い入れがないのだろうか？とも、思ったりで、自分の思考ももう少し柔軟にしなければならぬのかも。

随分前にも書いたのだが、兎に角囲い込みの方法がおかしい。

まず、可能にすべきは出版社どうのこうの……ではなく、作家が制作しやすい環境の統一ということではないだろうか？

勿論、編集しやすいツールであるということも、大変重要なのだが、リフローにするという時点で、ページレイアウトなどもはや皆無なのだから、ページレイアウトが必要なものは、すでに PDF という世界共通の囲い込みが出来ているのだし、その中で如何に著作権を保護していくか……であり、同時に作家も、全て自分の権利だ！と言うよりも、やはり、又貸しなどの情報股間の余裕を持った、物でなければ、購入者も敷居が高くなってしまう。

俺が欲しいのは、この又貸し認証機能かな。

実はこういうのは、電子図書館などにも、相当有利な発想だろうと思う。

カラオケが流行り、詠われるために、作者に利益が入る。勿論、人気シンガーであれば有るほどという条件が必須なのかもしれないが、こういう条件は、何処においてもさほど変わるものではないだろう。

まず、電子書籍を利用するために、必要な根幹はなんなのか？という部分で、どの端末に縛り付けるので

はなく、電子書籍を利用するために、どういうルールが必要なのか？ということが大事である。

会員書というものが、当然必要で、そういうものの管理はどこがするのか、誰がするのか？ということであり、URLですら、世界の統一基準で管理されており、枯渇が問題視されていることで初めて知る人もいただろうIPv4も、やはり管理されている。

なので、どの出版社のどのコンテンツが豊富で、より多くのコンテンツを獲得するのかという、小さな駆け引きは二の次で、それは今まで通り、作家とのやり取りではいいではないか？

最近、非常に批判的なブログが続き、自分なりの方法論が描けないのも情けない話ではあるのだが……。

少し著作権の話を

少し著作権の話を……。

といっても、申し訳ないですがこれは著者も勉強中でして……。

著作権は、どこかに登録すれば成立するというものではなく、制作した時点で権利は著者にある事になります。

つまり、公開されることが権利に繋がるということになるのですが、どうやってそれを証明し保護するのか？というぶつんに有ります。

フリーの著作物に関しては、個人で管理することになり、その権利を証明する手立ては限りなく少ないという事になります。

とまあ、少しずつの更新となりますが、取りあえず発見したリンクを、張っていきたいと思います
独自で調べた結果ですので、皆様も探してみてください。

<http://www.bunka.go.jp/index.html> 文化庁

<http://www.e-jpca.com/> 日本出版著作権協会

<http://gyouseiapp080.jimdo.com/> 著作権代行登録

2012/11/11 現在。

現在、個人で電子出版をするとなると、サイトに委託して、ロイヤリティを受け取ることが尤も現実的な方法である。

いま、このブログを書いているパブーさんも、良いサイトだと思うのですが、プロ版の方に少々難点があります、筆者は、アップロードした PDF が 216 ページ中 20 ページの落丁が見られましたし、PDF をダイレクトにアップロードした場合、試し読みに関しての設定が出来ないという状況になりました。

色々掘り下げてみなければ、解らない部分が有りますので、各自プロ版の仕様を確認してから、お試しください、筆者が至らない場合は、素直に謝罪させていただきますし、落丁の無いアップロード方法があれば、ご教授願いたい次第であります。

現在もう一つ見ているのが DL Market というサイトで、ここも可成り優秀ですが、どちらにしても、自らなにかアクションを起こさなければなりません。

一つ、ツイッターの活用。

活用においては、発言において、必ずハッシュタグを着けるようにする。ただし、ダダ等だとハッシュタグを着けるのはダメだと思います。

ホームページの設置。

自分の作品群を乗せたホームページの設置で、そこから販売サイトへの誘導も忘れずに。

スマートフォンが普及している事を考えれば、ホームページはスマートフォン向けのものが作成出来るものが望ましいです。

新しいホームページビルダーなどは、そういった機能があるので、極力コストを掛けたくないでしょうが、やはりサイトでのトラブルは、信用に関わるので、HTML 言語に自信の無い人は、ツールの確保も必要です。

フリーでも、様々なものが出回っておりますので、探してみてください。

ブログもいいのですが、ブログは最終的に閲覧の整理が聞かなくなりますので、ブログはホームページとの併設が好ましいでしょう。

Facebook や Google プラスなどもありますので、そちらの活用もよろしいでしょうが、実名主義の SNS なので、筆者は、自分のペンネームが通用するようになってからでも良いと思います。

筆者の場合は、パブーは、更新向けだなと思いました。

完成した書籍に関しては、映画の完全版みたいに、ストーリーを付け足す事も少ないでしょうし、付け足すと内容に矛盾が所持兼ねないので、乱丁の訂正くらいに、止まると思います。

編集が無い＝更新がない。ですから、当然放置しているとランクが下がってゆきます。そうならないような工夫をなににするか？という、やはりブログでの更新。

ストーリーなどの、自分の先入観。編集後記などのこまめな手入れかもしれません。現在のストーリーの進行状況などのお知らせも、良い手段かもしれませんね。

兎に角、自分の宣伝手段になるものを、考えてください。

現在平行して、ダラダラと書いている俺イズムという、ブログですが、地味に閲覧数だけは伸びています(笑)

自分で切り開くと言うことは、それだけ自分出様々な事を自分で行わなければならないですし、知らなければなりません。

このブログの冒頭で、こういう流れのサイトがあればと思うと書いたのですが、DLMarketさんは比較的、そういう流れに近いです。ただ、アフィリエイト手数料という形ですが……。

詳しくは、サイトでよろしくお願ひします。

販売を目指している方は、アップロード会員と、アフィリエイト会員の両方の取得をおすすめしますが、閲覧の確認のため、自ずと、購入会員の登録も必要でしょう。

とてもよく出来たサイトだと思います。

と、書いたもの、少しセッティングをみすってしまいまして、まだ開設しておりません><。

参考資料までに……。

パプーさんの方は、PDFの画像変換の処理に対する問題が解決次第色々試して見たいと思います。

自費出版は、大変名所も多いですが、販売したいサイトで販売でき、出版社の版権に縛られないというところですね。其れに、出したい作品を出せるわけですから、是非夢への一歩を踏み出してください。

裏サンデー

「裏サンデー」が大ピンチ、赤字で閉鎖の可能性という記事を読んだ。

電子書籍の構築やら問題提起をしていっているこのブログで御座いますが、今回は裏サンデーノア利用に疑問を持ちましたので、筆を執らせていただきました。

本当の狙いが何処にあるのかということはさておき、思い切り主観で書いていきます。

この規格が文面通りだったら、単なるバカとしかいいようがない まあ、きっとそういうことではないんだろうけど……さ。

でも、あえて真正面から受け取って書く。

そもそも、コミックスってさ、コレクション思考なんじゃないかね。気に入ったマンガを一期読みするために、コミックス買う人もいるし 雑誌で要らないマンガの分のお金を払いたくなかったりするから、雑誌は学校なんかで、友人に借りて読んだりして、真剣に読みたいから、単行本を買う。また読みたいと思うなら、手元に置くだろうし、もういいやと思ったら、ブックオフなんか売っちゃうだろうし。

無料ってのは、そもそも其所へ集客力を付けるための手段で、コミックスを買ってもらおうとか、コミックスを買ってくれば、存続出来るとか、お涙ちょうだい商法とか、そもそもあり得ないわけで。

無料で読めるものを、態々コミックスで買うのか？と俺なら、多分買わない。だって、デジタル保管されたマンガを、劣化無く読めるんだろ？ だったら其れが一番いいに決まってる。本は手にとって読みたいが、だからといって、無料で見たものを、態々物理媒体で読みたいのか？ もし読みたいのなら、相当な人気作品でないとき。

でも、人気があるから有料にしても売れるのでは無くて、入手手段が有料でしかないから、みんなその価値に納得して 購入するのが基本原則だと思うのだけでも……ね。

まず、有料でもらえるものは、有料でもらう。

こんな当たり前の話を無視擦るとは、出版社は本当に作家のことを何も考えていない。

勿論、作家にはロイヤリティなどは払われており、作家そのものは損をしていないのかもしれないが、しかし何れコミックス化を狙うならば、無料のデジタル化は、間違い無く足かせになる。

上記したが、コミックスを買うという意味を、正しく理解して欲しい。

勿論扉絵なども入手したいところなのだが、だとすると、美しい扉絵にはもっと別の付加価値を与えるべきであり、それは漫画の内容とは、別次元の話であり、コミックスの価値で、購入するのではないだろう。寧ろこうである。

単行本を購入してもらった人には、その漫画のスピノフが裏サンデーで読める！である。

あるいは、それに対する公認二次創作が、裏サンデーで読める！と、こうすべきではないのか？

裏と名付けておきながら、表参道の店を裏に引き込むとか、本当にどうかしてるんじゃないか？ 其所でしか見られない付加価値とはいったいどういうものなのか？

無料なら誰でも飛びつくだろうが、無料というものはそもそもそれだけなのである。

リピートを狙うなら、その話に対する無料購読回数を儲ければ良いが、一度読めたのなら、ある程度記憶を反芻させれば良いのだし、単純な読みたくなればアカウントを作り続ければ良いのだから、こういうゴミの散乱はよしの方がいい。あまり良い方法ではないね。

一見新しい提示に見えるが、なんと言うことはない。AKBの総選挙権を得るために、CDを買うようなものである。圧倒的に違ふとすれば、スピノフや二次作品を知るために、本編を読むことが必須条件となると言うことだろうか？

はっきりいって、無料で集客力を狙うやり方は、もう破綻してる。

だから、当然単行本から、ネットに引き込む形にするには、立ち読み満載の本から、シリアル管理された本にするための体制というものが必要になるわけだし、今のままのコミックスの売り方は出来なくなる。

立ち読み公認用の、サンプル出荷も当然必要になってくるしね。

コミックスを買うことに対する付加価値の付け方を、完全に見誤ったやり方だねと、諷いようだが、書かせてもらう。

漫画と小説の違いというのは、一冊に掛ける閲覧時間の圧倒的な差であるため、小説の場合は、電子書籍→物理媒体。小説の場合は、一つの作品に触れ続ける時間というものが、漫画とは圧倒的に違い、非常に中毒性が高く、読みふけるという言葉があるくらいである。

漫画の場合は、物理媒体→特典としての電子書籍。採用が非常に淡泊で端的、閲覧時間もそれほど長くなく、画像があるため、映像でのストーリー認識がメインになっている。

劣化のないクオリティを求められている。本当に大きな違いがある。

更に裏を読むとすれば、電子媒体に対する失望感を、周囲に与えるために、敢えて失敗しやすい手段を執って見せている。

これは、紙媒体の存続と、現在の業界の囲い込みを維持するためという見方も出来るが、これに関しては少々考えが行き過ぎか？

いずれにしても、こんなやり方じゃ、電子書籍は進まないね。

無料の書籍を探してみよう

タイトル通りである。

結局面白かろうが面白く無かろうが、宣伝された物が読まれる。当然の結果と言えばそうなるのだが、じゃあ無名なものが面白く無いのだろうか？という、疑問は以前にも投げかけた。

読まれていないものが、面白く無いのか？といえは実はそうではない。結局、そういう宣伝力の差なのだろうと、今更ながら再度書く。

世の中には、お金を出してでも、読んでもらいたい作家が五万と居ると言うことを忘れてはならない。

なので、探せば見つかるのだ。ただ膨大な量であるため、探すと言っても結局検索ヒット数や、レビューなどによって随分異なる。そこで思った。まあちょっと実践していないので、まだ書かないが書いてみようと思う。

これは自分が読んでもらう手段であるため、そうそう安っぽく手順を公開するわけにもいかない。

ただでアイデアは盗めないということだけは、多くの人に理解していただきたい。

個人で出来る事において、ツイッターなど、コミュニティに書き込む手段はあるのだが、ツイッターは兎も角、コミュニティというのは、飽くまで作り手サイドが集まることが多く、読み手側が多く集まるとは言いがたいのだ。

読み手側の意識改革をして貰わなければならない。

そう、そういう運動を作り手側のコミュニティから、読み手側のコミュニティに変えてゆかなくて張らない。

自分の作品だけを宣伝しては駄目なのである。

ヴァーチャル書店にしてゆく必要がある。

あと、個人敵にこれはタブーだと思ったものも、随時追加してゆきたいと思う。

勿論、読んで欲しいがために、全く関係ないカテゴリーを含ませることなどが、其れに当たる。というわけで、少し短めなのだが、今回の文章は此処まで……。

電子書籍ハードの売れ行き鈍化

タイトルの記事をどこかで読んだ。

これはアメリカの話だったかな。数日前の話である。

このタイトルから見れば、電子書籍ブームが過ぎたのか？という錯覚と、そもそも電子書籍なんてブームなんてないコメントしている人もいるが、そもそも日本での電子書籍についての動向が今一であるのは、出版関係が二の足を踏んでいる状況がそうさせているのである

其れに加えて、ペーパーレス、直販であるにもかかわらず、大して安くないケースや、IDでハードウェアに固定してしまうことが、屢々有るということ。

これじゃあ着メロと同じですよ。音楽を購入しているつもりなのに、ハードウェアが変わると、着メロを取り直さなければならない。また同じだけの料金を払わなければならない。

こんな物に対して、誰もお金を払いたがる訳が無い。

という話と、このタイトルは少し違う。

電子書籍端末は、其れほど流行に流されて買い換える必要性の無い端末であるということである。ある程度気に入った端末が一つあれば、其れを持ち続けられれば良いだけの話であり、更に加えて言えば、マルチメディア端末（タブレットや、スマートフォン）があれば、敢えて電子書籍専用端末を持つ必要性がないということである。

あえて、ハードウェアを幾つも持ち歩く必要性がないのに、専用端末を態々持ち歩く必要など無いのである。

もし必要性があるのだとすれば、スマートフォンやタブレットのバッテリーが、一日二日程度しか保たないということである。しかしながら、これとて、オフィスや自宅で、充電出来る場所があれば、其れほど苦になることでは無いし、車に乗っている人間であれば、移動中に充電していれば良いのである。

特にアメリカなどは車社会なので、こういう場面では日本より遙かに多い。ホテルでは電源を使えば良い。

現在のスマートフォンであれば電子書籍だけのことを考えれば、一日くらいは楽に保つし、先ほど発売された IGZO ディスプレイ端末であれば、更にディスプレイの省エネ化が進んで、より保つ……だろう。

残念ながら、筆者はこの時点で、アクオスフォンに買い換えただけなので、IGZO ディスプレイ端末を入手するのは、もう少し先の話になる。

それでも、以前の IS 03 から比べれば、一日普通に使う程度ならばバッテリーは70%程のこっているし、何だかんだと触っていても50%は残っている。大したものだ。

話が逸れた。

動的な処理が少ない、電子書籍において、CPUも其れほど多く使用することは無いだろうし、要するに其れほどのスペックを要求する必要もない。だから、これは当然なのである。

寧ろ、電子書籍を読める環境というのを、如何に多くの人間が手にしているのか？ということが重要であり、そのフォーマットが如何に柔軟に受け入れられているのか？ということが、大事なのである。

PDFは少々かさばる部分もあるが、それでも、現在のSDカードの容量から比べれば大したことは無いし、クラウドに置いてしまえば、本体容量を気にする必要は無い。

日本国内においては、yahoo プレミアム会員であれば50GBのネットドライブを入手することが出来るし、最近では自宅サーバーを構築することも、さほど難しい事では無い。

尤も、上気したように、ハードウェアとソフトウェアの固定をされてしまうと、折角の電子書籍も、半分

死に体となるだろう。

とまあ、タイトルに関してなのだが、少々悪意を感じる記事を見つけたので、少し此処で書いた。

記事の発信元が何処なのか？というのは、此処では書かない。

よく、ソースファイルはどこなのか？と訊ねられることもあるのだが、日本は本当に電子書籍化を進める木があるのか？というのを、考えた上での一筆である。

で、どうやら、電子書籍の囲い込みに関しても、日本はリードできないままに負けてしまいそうであり、何を探しても、アマゾンで探した方が早いという状況を作られてしまうと、各出版社のサイトを訪れること無く、アマゾンに利益を吸い上げられるだろうし、フリーの作家もそういった流れに乗らざるを得なくなるだろう。

どの出版社であっても、フリーであっても、国内で頑張っている作家のために、国内であれば、国内のサイトで探す気になれるような、筋の一本通ったデータベースを作って貰いたい。

その上で、出版社発なのか、個人出版の物なのかという、棲み分けを行いつつ、良い作品を多くの人に拾い上げて貰ってゆけばと思う。

今はうちの賞に受かりたければ……うちで出版したければ……という、そういう囲い込みなのだが、そろそろ、出版社が、血眼になって、フリーの作品をドラフトのように、探し回らなければならない時代になった方が、何となく面白いんじゃないかな？と、ふと思った瞬間でもある。

これは、この記事を書いている最中に思った、他愛も無い発想だ。

こういうサイトを構築しても面白いなと思う。

余談もほどほどに、今回はこのあたりで。

人気作品の映画化

2013/03/02

先日、某番組で、人気作家の実写か荷対するロイヤリティに関して、大きな物議が醸し出された。

その真意のほどは解らないが……。

普通、その作品に関わる印税というものは、販売されればその分だけ還元されるべきなのである。これは当然であり、どの製品に対しても行われている当たり前の還元なのである。

尤も日本の場合には相変わらず、特許に対する個人への還元を行わず、企業の内部留保に変えたがるが、結局こういう事をしているから、優秀な開発者が、すぐによその国へ行ってしまふのだということになる。

日本の作品は、基本著作権に守られているようだが、実際は、出版社東都契約をしていなければ、殆どその著作が守られる可能性がないという事になる。

浅いながらも色々調べて居るのだが、これだけデジタル化されているにもかかわらず、その作品に対するデジタル登録による、著作の保護が全く成されていない現状があり、このあたりはもう一元的に、データベースしていくべきでは無いのか？とおも思う。

公開しないまでも、自分の著作物は、レンタルサーバーなどに、アップしておく必要は有る。

アップされた情報に関しては、必ず何時どの時点でアップロードされたのか？という、情報が付加されるからである。

とまあ、某作品に関して、大変横道に逸れてしまったのだが、要するにこれが日本のクリエイターに対する、現状の扱いと言える。クリエイターとは、作家でもあり、作曲家であったり、そういう分野の人達をひとくくりにしてしまっているが、多くの人に利益を還元してもらえらる仕組みになればと思う。

兎に角、横暴なのである。

勿論多大な宣伝費などが掛かっているため、其れほど沢山の利益を還元されるわけでは無いのかもしれないが、クリエイターは、作品管理を販売元に管理させすぎてはいけないと言うことであり、自分の作品をどうにかしたいという話が合った場合に、どれだけの割合で売れば、どれほどの利益を還元してもらえるのか？という事を確りと考えてもらいたい。

其れに怒りを覚えた作家達は、やはり、メディアに対する提供や、独立といった形を取っている。

兎に角、クリエイターが作品の提供において、まず解放するのは、一次利用のみとし、二次利用意向に関しては随時契約とし、その都度じっくり考えていくべきである。

メディアでよく見ている、チョ尺兼保護のために動いている作家は、それなりに考えて居るのかもしれないが、メディアに煽動されている作家は、どうも本当の意味で、個人の権利保護のために動いているようには見えず、寧ろ本当の意味で、自分達の権利保護に対して、全く無知なんじゃ無いか？と思ってしまうほどである。

特に、売れている作家というのは、気にする必要もなく売れているのだから、気にする必要が無いのである。寧ろ多くの作家が、多くの権利を得るために、彼等はどれだけ動いているのか？と思う。

よくよく考えて欲しいが、ある日突然ヒットしてしまつたら、舞い上がってしまうのである。

売れた実感に乗せられて、創作活動にしか打ち込んでいないクリエイターを、正しく守ってやっているのか？とい疑問がある。尤も、無知であるままが言い訳ではなく、そう言った部分の自己責任も当然ある訳なのだが……。

というわけで、日本の著作物が、どうもクリエイターに還元されにくい仕組みになっているのは、やっぱり作り手側の無知さ加減にも寄るところなのだろうな？と思う。

で、結局アマゾンなどに、そういう仕組みを奪われてしまい、多くのクリエイターは、作品の保護を受けないままに、多くの作品を世間に垂れ流している現状になっており、近い将来多くの作品が無断に二次利用、あるいは悪意のある利用により、その権利を失ってしまうのだろうなということに、酷い危惧を覚えているのである。

筆者は思うが、そろそろ作品データバンクが必要なのではないか？と思う。

還元されない作品へのリスペクト

2013/03/02

先日、某番組で、人気作家の実写か荷対するロイヤリティに関して、大きな物議が醸し出された。

その真意のほどは解らないが……。

普通、その作品に関わる印税というものは、販売されればその分だけ還元されるべきなのである。これは当然であり、どの製品に対しても行われている当たり前の還元なのである。

尤も日本の場合には相変わらず、特許に対する個人への還元を行わず、企業の内部留保に変えたがるが、結局こういう事をしているから、優秀な開発者が、すぐによその国へ行ってしまふのだということになる。

日本の作品は、基本著作権に守られているようだが、実際は、出版社東都契約をしていなければ、殆どその著作が守られる可能性がないという事になる。

浅いながらも色々調べて居るのだが、これだけデジタル化されているにもかかわらず、その作品に対するデジタル登録による、著作の保護が全く成されていない現状があり、このあたりはもう一元的に、データベースしていくべきでは無いのか？とおも思う。

公開しないまでも、自分の著作物は、レンタルサーバーなどに、アップしておく必要は有る。

アップされた情報に関しては、必ず何時どの時点でアップロードされたのか？という、情報が付加されるからである。

とまあ、某作品に関して、大変横道に逸れてしまったのだが、要するにこれが日本のクリエイターに対する、現状の扱いと言える。クリエイターとは、作家でもあり、作曲家であったり、そういう分野の人達をひとくくりにしてしまっているが、多くの人に利益を還元してもらえぬ仕組みになればと思う。

兎に角、横暴なのである。

勿論多大な宣伝費などが掛かっているため、其れほど沢山の利益を還元されるわけでは無いのかもしれないが、クリエイターは、作品管理を販売元に管理させすぎてはいけないと言うことであり、自分の作品をどうにかしたいという話が合った場合に、どれだけの割合で売れば、どれほどの利益を還元してもらえるのか？という事を確りと考えてもらいたい。

其れに怒りを覚えた作家達は、やはり、メディアに対する提供や、独立といった形を取っている。

兎に角、クリエイターが作品の提供において、まず解放するのは、一次利用のみとし、二次利用意向に関しては随時契約とし、その都度じっくり考えていくべきである。

メディアでよく見ている、著作権保護のために動いている作家は、それなりに考えて居るのかもしれないが、メディアに煽動されている作家は、どうも本当の意味で、個人の権利保護のために動いているようには見えず、寧ろ本当の意味で、自分達の権利保護に対して、全く無知なんじゃ無いか？と思ってしまうほどである。

特に、売れている作家というのは、気にする必要もなく売れているのだから、気にする必要が無いのである。寧ろ多くの作家が、多くの権利を得るために、彼等はどれだけ動いているのか？と思う。

よくよく考えて欲しいが、ある日突然ヒットしてしまつたら、舞い上がってしまうのである。

売れた実感に乗せられて、創作活動にしか打ち込んでいないクリエイターを、正しく守ってやっているのか？とい疑問がある。尤も、無知であるままが言い訳ではなく、そう言った部分の自己責任も当然ある訳なのだが……。

というわけで、日本の著作物が、どうもクリエイターに還元されにくい仕組みになっているのは、やっぱり作り手側の無知さ加減にも寄るところなのだろうな？と思う。

で、結局アマゾンなどに、そういう仕組みを奪われてしまい、多くのクリエイターは、作品の保護を受けないままに、多くの作品を世間に垂れ流している現状になっており、近い将来多くの作品が無断に二次利用、あるいは悪意のある利用により、その権利を失ってしまうのだろうなということに、酷い危惧を覚えているのである。

筆者は思うが、そろそろ作品データバンクが必要なのではないか？と思う。

契約時にあってほしい契約内容

2013/05/09

これは、デジタル……と、本書の内容とは少しずれるが、著作権との関係で、少々書くことにする。

実は、出版社と契約する際に、出版権のトラブルを起こさないために、多数の契約条項が書かれているのは、誰もがご存じであり、その多くが、クリエイターや、創作活動の、阻害になっていることが多い。

勿論、売るということは、利益を得ることなので、その利益を逃さないための、手段なのだが、実は可成り欠損部分が相当に多いような気がする。

それは、掲載雑誌の廃刊や休刊、および出版社の倒産における、契約解除の内容である。

要するに、出版社に帰属するとは書いているが、雑誌が廃刊になった場合や、出版社そのものが、倒産してしまった場合、素直に版権を、著作者に返還する契約事項である。

勿論、廃刊休刊による、処遇というのは、出版社が倒産した訳ではなく、販売のチャンスもあるし、姉妹誌に掲載することもあるので、救済される可能性はあるが、版権を抱えたまま、休眠、倒産した場合、版権の譲渡は、作家には無く、出版社に帰属するため、作品を引き上げる事も出来ない。

そんなケースも存在する。勿論全てがそうではなく、うちは確りしてますよ！という所もあるだろうが、その当たり確り確認したいところである。

筆者が尤も危惧する部分は、ある程度宣伝力のある作家は良いのだが、新参の作家クリエイターには、あまり多くの選択肢があるわけでは無く、理解した苦渋の選択を強いられる事もあるだろう。

特に受賞作品になると、当選するために、作品を書いたのだから、当然掲載されたくないわけが無い。

勿論企業は、倒産することなど考えるものではないが、可能性は否めない。世の中何があるのか解らないのだ。其れは、誰にでも起こりうる事であり、例外はない。

勿論、順調な経営を行っているならば、そんな急転直下の物語など、そうそう起こりうるはずもないのだが……。

これは一つ、作家やクリエイターに対する、誠実な契約内容になるのだと思う。

当社が倒産および、経営不能となった場合、作品の版権等は、作家に変換するものとする。ただし、販売及び生産済みのアイテムに関しては、これに含まれないものとする。

蒸気のような一文は、提案として、どうだろうか？と思う。

実際契約内容に書かれている、所もあるだろうが、特に初めての契約に至る場合、浮かれすぎて、作品の版権全ての放棄に近いような、契約でないかどうかというのを、じっくりと考える必要があると思われる。

児童ポルノとアニメ

デジタルコンテンツという流れから少し逸れるが、今後多くの公開物がデジタルで行われるのだから、ある程度踏まえなくてはならない。

多くの作家がこれから、自由に開かれた市場で、利益を得ることになると思うのだが、児童ポルノがアニメという範疇にまで引っ掛かってくると、恐らくフリー作家の著作物に、犯罪の嫌疑が掛けられる可能性が非常に高いということになる。

筆者は貴補的に、現在の出版社の大勢に、非常に懐疑的であるので、こういう書き方になってしまうが、フリーの著作物において、こういう難癖を付けることで、利益の拡散を防止する狙いがあるのでは無いか？と思う。

勿論、あからさまに幼女の裸体を前面に押し出すのも、正直いかがなものかと思うが、しかしながら、そう連想させるだけであり、そうではないという主張があっても、嫌疑を掛けた側の一方的な、解釈により、その創作物が破綻してしまいかねない。

表現がつまらなくなるとか、つまらなくなるトカの問題ではなくて、幻想世界における価値観設定を、情報共有を嫌った団体に、一掃されかねないという状況になっている。

小さな利益で、生計を立て居るウチは問題無いが、それが市場を脅かすような存在になった瞬間、シャットアウトされる可能性が高いのだ。

純文学が素晴らしく……という、文学的な価値観も解らないではないし、性的な表現ばかりに頼っている作風というのも、正直それはそれで品祖だと思うのだが、何においても、媒体の普及において、一般的に言われる、下世話な情報というのは、実に欠かせない存在なのだということを、覚えておかななくてはならない。

日本人の産業概念において、クールジャパンという言葉が漸く出てきたことに関しては、少し進展があるのか？とも思ったのだが、なんとすることは無い、産業界の石杖になるために、フリーのクリエイター達をただ働きさせるだけのことである。

世界市場に向けて、世界標準の中に、日本の創作物を（勿論、実際の商品も含む）浸透させるためには、ある程度遵守させるために、そういう動きも必要ではある。

これは、日本のサブカルチャー的なもの、全てが有害であると、世界にレッテルを貼られる可能性を防ぐために必要なものかもしれないが、そもそも、筆者が思うには、少年少女に見せるために、表現を著しく稚拙にしてよいとは思わないのである。

どんどん、話が逸れていくがそれでも書く。

最近のハリウッド映画が非常につまらないものに思えるのは筆者だけなのだろうか？正直イン-halfは衝撃的だったし、セックスシーンも当たり前のようにあったが、其れが有害だなんて、思わなかったし、今でも思っていない。

確かに、美女の裸や、過激な殺害シーンなどもあったが、一つの人間の異常な琴線に触れた作風などは、やはりその世界観にとって必要なのではないか？と思う。

勿論児童ポルノではないし、大人の女性なのだから、児童ポルノには引っ掛からないのだが……。

極論を言ってしまうと、要するに欲求を刺激するような映像作品を作るなどということらしい。確かに、弱者に対して、低欲求をぶつけることは、非常に危うい行動ではあるが、性癖の問題も大いにある。

特に成熟社会において、自立性の高い女性が増える中、古い時代のように、男性に対して従順で無ければ

ならない状況など、何一つ無くなったわけで、要するに、家長相続制の元、女性が泣き寝入りしていただくことであり、早い女子での結婚においては16歳や15歳である。

十分立派なロリコンである。社会を知らない女子をめとることで、男性に都合の良い教育をしており、それが当然だっただけで、問題にならなかったと言うことだけで、元来男性のロリコン思考というのは、現代社会の法律が強引に決めただけのことである。

勿論、女性の成熟度を踏まえてのことであるし、晩婚化も、男性が求めるはけ口の、安定が揺らいだことも原因である。

自由恋愛が多くなり、性が解放されると同時に、晩婚化により、安定的な性関係が崩壊したために、実は性生活というのは、非常に不安定化したのだと言って良い。

なので、極端な性描写が、歪んだ性癖を膿んだのではなく、時代の発展が、極端な性描写を膿んだと言うだけのことで、今更これを禁じたところで、社会的な鬱憤に収まりがつくわけでは無い。

寧ろ、「俺の嫁」などと、言わせてる方が、まだ安心なのかもしれない。

まあ、少女ポルノは、性癖の問題なので、その性癖が異常だという、文言については、上記したとおり、昔の女性の方が、遙かに早婚であり、四十を迎える男が、十代の女子を娶る事など、ザラにあったのが日本社会であり、女の子は色っぽく感じれば、婚姻年齢であり、親の言いつけ一つで、10歳で嫁いだりなどと、遙かに自由な社会だったことは、今更ながらの話である。

そして、男性も、臆面も無く、おいらと結婚しよう！と、言えた時代だった……はずである。

うむ、随分話がずれ込んだ。

結論！、児ポルを創作物に適応しても、アングラに潜って陰惨になるだけの話であり、定めるのは、幼女を性奴隷にしないためのものだけで良い。

志賀直哉の「城之崎にて……」など、文章であるが、風呂場のシーンなど、完全に14歳の少女のヌードシーンである。当時文章主流と言うだけのことであり、十分ロリコン表現であったことは、言うまでも無い事実である……と、曲解しすぎたか？まあ性描写はないが……。

以上

探してる方からしてみれば、どうでも良い話であるが……。

電子書籍の良いところは、コストが掛からない、物理的なリスクが、可成り軽減できるといったところですが、敷居が低いと言うことは、要するに乱立しやすいと言う所である。

何が一番悪いのかというと、ボリュームが解らない……っていうのも、取っつきにくい要因である。

すでに著名な作品ならば、信用もあるし、読みたかったが本棚を圧迫したくない人や、絶版になってしまった作品のリバイバルなども期待出来る訳で、これが一つの魅力なのだと思う。

新規作家にとって優しい場所にすべきかどうかということなのだが、これは自由を取るか、利便性を取るかによる。

利便性というのは、出版社による宣伝に期待すると言うことで、宣伝された作品は、出版社に認められた恥じない作品である。

ここまで、出版社に対して辛口なコメントを言ってきた筆者であります、否定文言ばかり書いても仕方が無いので、否定しないように頑張ります。

当然、この利便性を得るためには、応募からの勝ち抜きや、持ち込みによる、担当との話し合いになるのだろうが、小説関連においては、応募が多いし、何億という作品が仮にひしめき合った場合、そこから賞に選ばれるのは、一作で、残り数作は佳作ということに成り、表舞台に立つのは、0.2%にも満たないわけでして、他の方法論となると、有名人になり、ネームバリューを得るか？という所になる。

宣伝力があり、作品の内容にかかわらず、商業的利益が見込める本と言うことになる。

勿論商業なので、当然の結果なのだが、この利益構造は、クリエイターにとっては、あまり良い環境ではない。

アマゾンなら、きっと見つけてくれるかもしれないという期待感が、作家側にはある。

一度有名になれば、寧ろ出版社は、必要無くなるんじゃないか？と思う。勿論メリットは、著作権に関する部分もあるため、自己管理をしなくても良いというメリットがある。

逆を言えば、多くの作品は、絶えず著作権侵害の危険にさらされていると言うことになる。

本を探している側にとっては、どうでもよい事なのであるが、電子出版の裾の尾が今一広がらないのは、実は販売ルートの方法論が、あまり変化していない身体と思う。

フリー作家で、自由なんのもいいが、実はこれが、出版物の販売低下を齎している要因でもある。

無料の作品なら、少々ミスがあっても、責任追及に問われないし、読んで面白ければ御の字なのである。実は、当選から漏れた多くの作品が、こういう現状に置かれている。

どうせ、利益にならない作品なのだから、フリーで公開してみよう。

一見宣伝にもなるように思えるのだが、多くは、フリーだから目を通してくれるが、お金がかかれば、残念だが、次の新しい作品を探そうとなる。

本屋に行けば、本を購入するのが当たり前で、お金を出すのが当たり前なのだが、本来この、金を出すという当然の行為が、デジタルでは崩壊している。

デジタル産業がお金にならない要因の一つになっている。

極論を言えば、作品を書くに至って、値段を付けるのが当たり前になり、その代わり、価格は百円以上にしないとか、フリーの低価格流通を、当たり前にしなければならないと思う。

でなければ、売れるべきデジタル書籍に、その価値が付けられない。

フリーで面白い作品が幾らでも転がっている現状において、少々の作品に対して、金を出すだろうか？ということになる。ただ、この少々面白いというのは、可成り読者の主観的な部分であり、要するに探せばある現状が蔓延しているという事である。

写真集で言えば、アイドル本も良いが、インターネットで検索すれば、自分の愛でたいタイプの女性の画像が、検索されて、探せる間の、満足感も得られる。

実は、この不自由感と満足度どちらのは、可成り密接な関係があり、つまり、達成度となるのであるが、昔はかかっていたコストが今は掛からないということになる。

今、アイドル年間というものに、どれだけの価値があるのだろうか？となる。

ウィキペディアで、個人の活動が閲覧出来、画像も閲覧出来て、どういう人物だったか確認出来る。

とまあ、全ての情報がこれくらいに、無価値にされてしまっており、敢えて専門の情報を購入する必要がなくなっている。

だから、構造的にはこうする。

まず、全ての著作物に関しては、登録された、出版社に預ける。

預けられた作品は、基本的に全て公開され、公開される。

公開された作品は、正しく著作権管理され、模倣作品に関しては、全て個人に責任を負って貰う。

出版社は飽くまで、公開する場所を提供しているに過ぎない。

公開したい昨夏からは、ある程度管理料を払って貰う。

当然、作家の登録を正しく行う事を前提とする。

上記のために、日本作家協会などの創設を行い、作家登録をしてもらい、その作家が現在どこの出版社と契約状態にあるか？ということ、明確にする。

作家とその作品群は、結びつけられ、契約出版社の利益とする。

出版社を移れば、作品群事の移動となる。

管理料により、販売できる作品の価格設定を決めることが出来る。

今は、ブログ感覚で、作品を公開している人も多いが、これは要するに作品の囲い込みの問題である。

作家を逃したくなければ、出版社は作家と上位契約を結べば良いし、どうしても良いなら、移籍を認めても良い、フリーエージェント制にする。

これを行うには、当然作品を包括的にアーカイブするためのサーバーが必要であり、作家は当然これに対して、管理費を払わなければならないが、現状のレンタルサーバーの事を考えれば、数ギガで一千二百円程度の管理となるだろう。

全ての、作品群は、此処に記録され、作家と出版社は、そのサーバーを介して契約することになる。

これは、日本市場全体の管理と囲い込みの話であり、一つの改革案ともいえる。

アーカイブされたデータには日付が記録されるのだから、これは類似作品に対する防衛策になる。日本のデジタル著作物の保護にもつながる。

今の各企業の小さな争いから一歩抜けだし、日本保護の一案件である。

探している方からすれば、どうしても良い話である。

クールジャパンといっておきながら、売る事しか表現しない、このプロジェクトは正直なんなのだろうかと思う。

結局、これは、日本製品の技術を、隣国にばらまき、競争力低下を起こした手法と、殆ど変化が見られず、ただ単に、その作品は素晴らしいね！と、それだけの結果に甘んじてしまう。

現在の手法は、結局多くの作品群から、一つの作品を、一部の人間が評価しているにしかすぎず、どれだけ多くの人材を開花させるか？という事につながっていない。

筆者の知っている本の虫は、やはり、一日に何冊も購入しているし、クローゼットにしまい込まれた洋服のように、本を山積みになっている。

電子書籍は、その解放といってよい。がだ、行われている事は、旧作のリバイバルに止まっている。

過去にも書いたが、物理出版は、よりクオリティの高いコレクションとしての、物理資産となるべきであり、物理媒体の代替えが電子書籍となっていていい訳ではない。

当然、利便性という観点から、其れはある意味、当然なのかもしれないが、物理媒体の補完とするのは、正直発展性を感じない。

これは、多くの商業的チャンスを如何に与えて、尚且つその囲い込みを行うのが誰なのか？という事であり、包括的には、日本という国である。

アメリカならアマゾン、日本なら楽天、しかし、言語の壁を越えて、非常にスマートさを感じるのは、間違い無くアマゾンである。アマゾン＝世界の構図。

最早、アマゾンで売れない物はない状況になりつつある中、どれだけの事が出来るかは、解らないが、少なくとも著作権の保護という観点では、アマゾンは、まだまだ無責任である。

其れに、電磁たるコンテンツは、費用が掛からないため、一円でもアマゾンに貢献してくれれば其れで良い状況になっている。

要するに、アマゾンに登録するよりも、より権利とチャンスを得られるのは？という観点を、確り捉えると、無秩序にアマゾン⇄作家の、構図は減らす事が出来るし、出版社の利益にもなる。

作家が、出版社に登録したくなる構図を作る必要性と、登録された作品には、必ず金額を設定する権利と義務があることを、常識とし、また、一定価格以下の作品と、出版社との上位契約以外の作品の管理は自己管理とする。

その上で、アマチュア作品に対する、大らかを、読者に持ってもらい、作品の修正を行わせて貰う。

上位契約は、編集者が付き、作品のフリーエージェントは許されない契約にする。より、クオリティの高い作品に、仕上がる権利を得ることが出来るというわけだ。

多くの作品が日の目を見ることが出来るし、販売にもつながる。

現状の選定方々方は、利益を得るために、楽をしすぎているし、絞り込みにより、多くのビジネスチャンスが潰されている。

潰されたチャンスの多くは、利益にもならず、宙に浮いている状態である。それが、無価値に蔓延しているため、更に得られる利益を圧迫している。

制作サイドも、利益が得られれば良いのは、当然である。加えて、大体の人が、一生に一度、一つくらいは良い作品を生み出せる能力を持っている。実はなにより、やってみようかな？という気概が一番で、作業環境においては、一部の文豪だけに、与えられた特権では無いということである。

一億人総作家時代と言うことは、まさにそういうことなのである。

デジタルコンテンツとしての、文庫

<http://p.booklog.jp/book/53289>

著者：京矢

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/kyouya999/profile>

ツイッター [kyouya999](#)

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/53289>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/53289>

著書

俺イズム <http://p.booklog.jp/book/47080/read>

デジタルコンテンツとしての文庫 <http://p.booklog.jp/book/53289/read>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパブー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社ブックログ